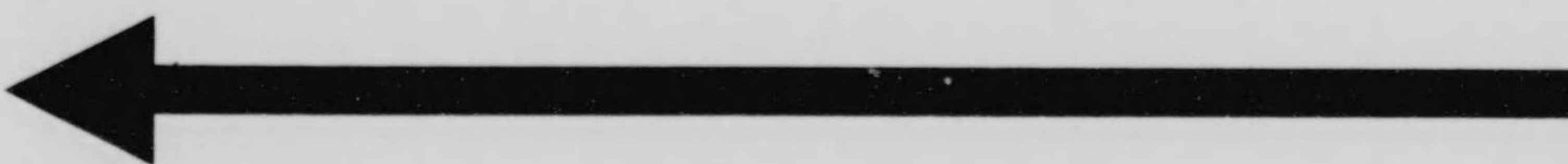


361  
71

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

始





9. 1. 15



清水美奈  
梅邑凌冬共著

後庭  
利用草花栽培





361-71

後庭利用  
草花栽培

清梅 水邑 美凌 泉冬 共著

東京 東文堂 發行

天正

6. 5. 14

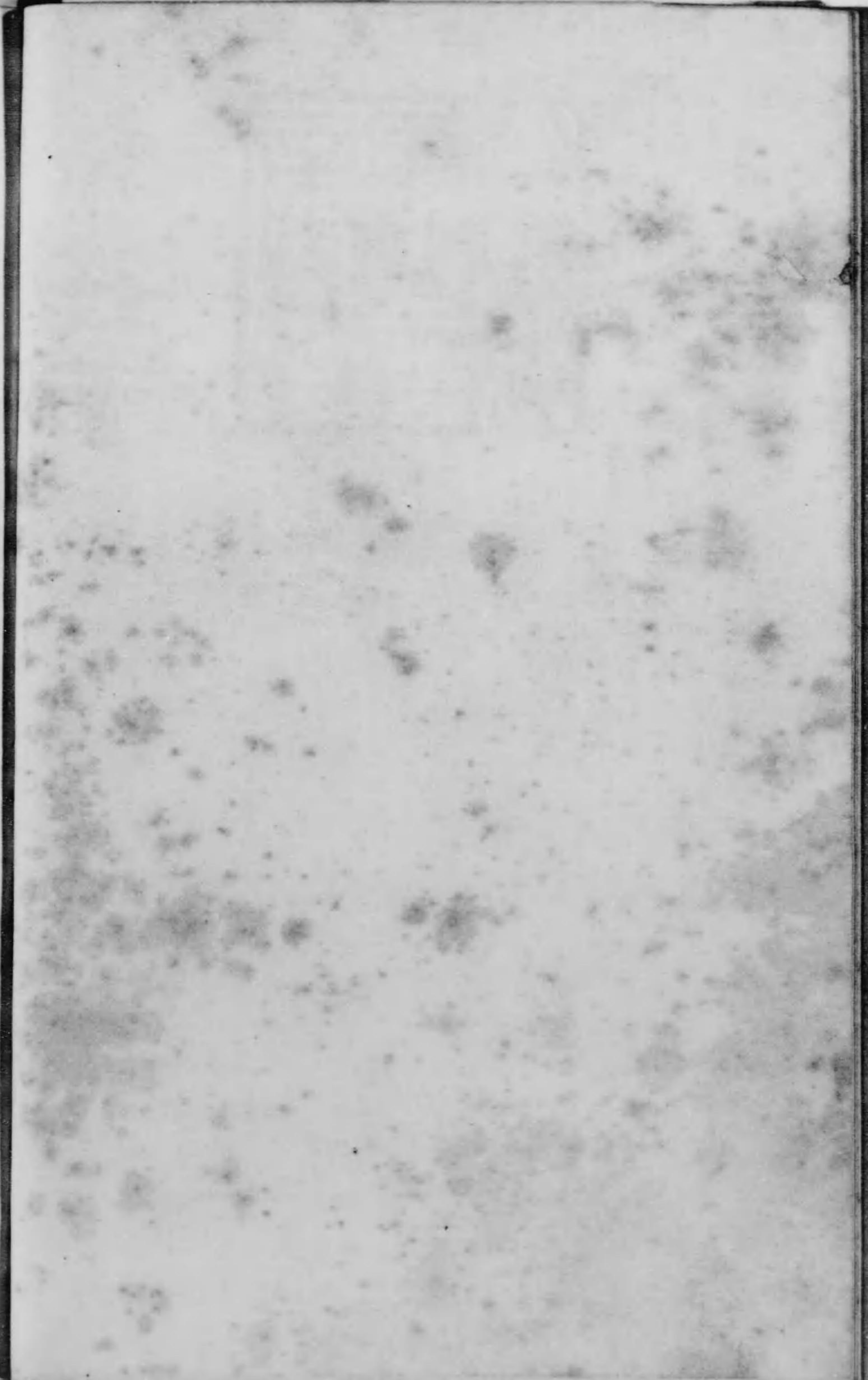
内交





上段(左) 金 蓮 花  
下段(左) ハラルコニエーム

上段(右) 麝 香 撫 子  
下段(右) 三 色 堇





挿 襟



花 盛



束 花



串花るす要に花盛





自序

園藝は國家的事業にして不朽の盛事なり、西督嘗て云り、園藝の盛否は以て其國の文野を卜するに足ると、其言甚た奇矯の如くなるも、自ら真理の存するものあり、吾人四時の行樂其の目を悦ばしめ心を樂ましむるもの豈啻に春花秋月のみならんや、古來珠技、碁棋、聲樂より體育を加味する射御、弓術等枚舉に遑あらすと雖ごも、觀賞に娛樂に朝夕體育に實行の伴ふものは實に園藝に俟たざるべからず。

由來本邦の風土、氣候に於て天然の樂園なるを以て、上は王侯相將より、下は農工走卒に至るまで、園藝の趣味を有せざるものなく、競ふて庭園を作り、或は果樹に、或は花卉に、各々嗜好を



發揮して其手腕を誇り、生産物を互に贈答批評する等、天下靡然  
として其の俗をなし、淳朴の風大に掬すべきものあり、従つて其  
體格良好に健全の發達をなし、毫も何等弊害の伴ふものなし、隱  
然富國強兵の重きをなせり、然るに時代の風潮は黒船の襲來によ  
り、素平三百餘年の惰眠を破り、遂に王政の維新を促し、松柏變  
じて薪となり、庭園化して工場となる、慘況に遭遇して、復た昔  
日の片影を留めず、爾來文化の東漸は滔々として底止する處を  
知らず、日に進み月に歩み遂に社界の根底を動かして、漸く生存競  
争の域に入り、知らざるに既に其渦中に投じ、戦々競々其及ばざ  
るを懼れ、惡戰苦闘の結果は心身の困憊を醸し、健康を害し、經  
倫施すに術なく、空しく有爲の資を抱きて病床に呻吟するもの千  
百何んぞ限らん、豈浩歎に堪へざらんや、是れ所謂生存競争の劇

甚に伴ふ、勞働の過度にして、四六時中毫も之か慰安の途を講せ  
ざるに基因せずんばあらず、之を聞く西人齡古稀に達するも尙ほ  
壯者に伍して敢て遜色あらざるに反し、邦人の概して早老にして  
體力虚弱の傾向あるものは、一は東洋の弊風にして、既に自ら老  
歳を氣取るの罪なりと雖も、抑々心身修養の足らざるにあらざる  
か、而して之が救済の途一にして足らずと雖も、娛樂的に慰藉を  
與へ併せて體力修養の一助たるものは、比較的花卉園藝の容易な  
るに如かず、是れ吾人の切に推奨して止まざる處なり。  
方數十里に渉る苗圃、果樹園より、僅に踵を容る、一步の花弁  
園も等しく是れ園藝なり、蓋し巨額の資を投じ徐ろに後圖を計る  
一大規模の園藝は、快は即ち快なりと雖も、這是専門的事業にし  
て吾人の推奨せんとする所謂園藝にあらざるなり、花卉園藝は之



に反し、少許の空地に何等の資本と技術を要せず、會心の種類を適宜に栽培し、以て心身の慰安を求むべく、大は數十百歩に及ぼし業務の餘暇尙ほ克く、娛樂と實益を圖るを得べし、故に本書は専ら副業的切花栽培に適する苗の分け方より、育て方、移植法、接木法等に至るまで細大洩さず、氣候風土、關係より、土壤肥料の配合等に至るまで極めて平易に、何人を問はず、一見直に花卉園藝の眞髓を會得せしむるに助めたり、幸に本書により其趣味を解し、慰安の方法を講し、心身の修養を兼ね、競争場裡の奮闘に堪へ、進んでは、之れによりて實利を得ば、嘗に一身の計のみならず、其國家社會に貢献する豈尠少ならんや、是れ吾人の本懐亦茲に在り、嗟呼園藝は國家的事業にして實に不朽の盛事なり焉。

大正二年五月

著者識

實地利用切花園藝目次

第一編 總論

第一章 花卉の需用……裝飾用……佛花用……

- 其の一 花輪
- 其の二 花籠
- 其の三 花敷
- 其の四 花束
- 其の五 花標
- 其の六 挿

目次



第二章 切花としての結束方……………五

其の一 結束の方法

其の二 木本類の束方

其の三 草本類の本数

其の四 木本類の本数

第三章 切花としての収益……………一五

第四章 輸南向園藝植物……………二〇

其の一 輸南向觀賞植物種類名

イ、木本類

ロ、草本類

ハ、果樹苗木類

ニ、盆栽類

第五章 土壌……………二六

其の一 殖土

其の二 砂土

其の三 壤土

其の四 礫土

其の五 泥土

其の六 培養土

第六章 肥料……………三〇

目次

七



其の九	草木灰	其の八	骨粉	其の七	過磷酸石灰	其の六	硫酸「アンモニア」	其の五	米糠	其の四	魚肥	其の三	油粕	其の二	堆肥	其の一	人糞尿
第七章	花の管理	其の一	間引	.....													
																	三八

其の四	支柱	其の三	中耕	其の二	除草	第八章	害虫駆除豫防法	其の一	蛭	其の二	夜盗虫	其の三	根切虫	其の四	金龜虫	其の五	瓜蠅	其の六	油胡蘆	第九章	園藝用具
.....																					
																					四八



其の一 移植鏡  
 其の二 「ホーレーキ」  
 其の三 如露  
 其の四 鉄

第十章 繁殖法……………五二

其の一 實生法  
 其の二 挿木法  
 其の三 株分法  
 其の四 採種法

第十一章 花粉媒助……………六〇

第十二章 苗床及移植法……………六一

其の一 冷床  
 其の二 温床  
 其の二 移植法  
 イ、移植の際の注意

第十三章 温床……………六五

其の一 給熱法  
 イ、床溝  
 ロ、踏込



ハ、作土

ニ、床内の温度

ホ、床内の灌水

ヘ、床内の換氣及日蔽

第十四章 土窩……………七二

第十五章 温室……………七二

其の一 縁室

其の二 中帶室

其の三 熱帶室

其の四 温室の位置

其の五 温室の構造

第十六章 花壇……………七五

其の一 毛氈花壇

其の二 彩色花壇

其の三 リボン花壇

其の四 境彩花壇

第二編 各論

第一章 花卉栽培上の分類……………七九

其の一 球根植物

其の二 多年性植物

其の三 一、二年性植物



其の四 一年性植物

第二章 春の花……………九三

「イリス」、薔薇、花菱草、はるしや菊、はいとり撫子  
 「パンジー」、「エキシヤ」、庭菖蒲、牡丹、「ベチユニヤ」  
 「トリトニヤ」、「チューリップ」、千鳥草、「リュウゴン  
 シス」、「ルーピナス」、をたまき草、含羞草、勿忘草、「カ  
 ーネーション」、「カルセオラリア」、「月見草、鬚撫子、  
 「ラナンキュラス」、「百日草」、「マルゲリット」、「フリージ  
 ヤ」、「フロックス」、福壽草、翠菊、金雀兒、鐵線連、  
 朝露草、「アルメリヤ」、「アライサム」、紫羅蘭花、蔘蓀、  
 「アネモネ」、櫻草、金魚草、金鷄草、金箋花、「シネラ

リヤ」、「ジエラニーム」、「シクラメン」、菖蒲、「ヒヤシン  
 ス」、「ネモフ井ラ」、雛菊、水仙、水仙翁、「スウキトビ  
 ー」、香堇、

第三章 夏の花……………一四九

「ヘリアントース」、鞆繪草、虎尾草、「チキタリス」、白  
 粉草、羽衣草、貝殼草、「カレナ」、釣鐘草、河原撫子、  
 伊勢撫子、「ランタナ」、孔雀草、「グラジオラス」、「グロキ  
 シニヤ」、松葉牡丹、松葉菊、罌粟、芙蓉、扶桑花、「コ  
 リウス」、「ダーリヤ」、「アマリス」、朝顔、「アキメネ  
 ス」、葵、「アスパラガス」、「サルピヤ」、金蓮花、桔梗、  
 百合、「ミムライ」、鼠尾萩、芍藥、秋海棠、「ピスカリ



ヤ、向日葵、射干、「モントブレテヤ」、千日紅、石竹、  
 睡牒花、睡蓮、虞美人草、「ゲイラルデイヤ」日草、  
 糸桔梗、「ロベリヤ」、蓮、花酢漿、「ベコニヤ」、「ヘリオ  
 トロップ」、長命菊、兜菊、をいらん草。

第四章 秋の花……………二二

萩、女郎花、「かつこあざみ」、段菊、月華香、鶏頭、「コ  
 スモス」、菊、「アゲラダム」

後庭 草花栽培目次終  
 利用

後庭 草花栽培

清水美泉 共著  
 梅邑凌冬



第一章 花卉の需用

本邦に於ける花卉の需用は、主に挿花として室内裝飾用に供せられ、又神佛の  
 供物用としても需用が少くない、歐米諸國に於ては其需用が一層廣く、或は花輪、  
 花束となして祭典式事の贈物となし、或は花籠、盛花として卓上の裝飾に供し、  
 其他敷花、襟挿等に用ひられる等到底本邦と同一の比ではない、而して花卉の需  
 用は社會の進歩と共に益々多きを加へ、本邦の如きも近來其用途著るしく増加  
 の傾向を示して居る。



我邦に於ける神佛の供花は特に記すべきものなく、又挿花は一種の専門的技術に屬し、到底本書に記述し得べきものにあらざるが故、茲には歐米に於て慣行せらるゝ花輪、盛花、花籠、花束、襟挿等に就き、其概要を述べて參考に供することとする。

其の一、花輪 歐米諸國に於ては、基督教其他の神裝に缺くべからざるもので其需用多きこと恰も我邦に於ける手向花の如くであると云ふ。現今本邦に於ても佛式に往々之を用ふるものがあるやうになつて來た、造り方は細き鐵線を以て圓形或は「ハート」形等に造り、其内部に水苔を纏絡したるものを充し、これに花籠、盛花等を製する際に於けると同様の竹串に花卉を結束したるものを、花の大小色彩により、適宜配列挿附するものである、簡單に線の代用として、常綠植物即ち「ヒバ」の如きもの、枝を用ふることがある。

其の二、盛花 多くは卓上の裝飾に供せられ、嚴寒の候と雖も、温室に栽培せらるゝ各種の花卉を用ひて、宴會等の席上に美觀を呈せしむることが出来る、歐米に於ける盛花用として花卉の需用は頗る盛で、恰も我邦に於ける挿花のやうであること云ふ、これを造るには先づ各種の花卉を切り取り、其切口に水苔に水分を含ましめ、串と共に結び付けて串花を造り、之を特殊の盛花器に、種々の色彩を適當に案配して挿すのである、盛花器内には、豫め水に浸したる水苔を丸めて能く縛るか、或は小形のものにあつては常綠樹の小枝を敷き、花串の挿附けに便する。「口繪參照」

其の三、花籠 花籠も亦盛花と同じく卓上の裝飾に供せられ、或は携帶に便なるが爲め、上流社會の歡迎送別又は廉ある式事の贈答に用ひられる、此造り方も盛花と同様にして、只盛花器に代ふるに花籠を以てしたのみである。「口繪參照」

其の四、敷花 本邦には未だ行はるゝこと少いけれども、歐米諸國に在りては夜會其他廉ある宴會の裝飾にして盛花を置きたる外其空間を埋め、卓上をして一



層華美ならしめんが爲用ふるものである、造り方は成るべく給水を要せざる花卉を撰び、之を短く切り取り、蔓性植物若しくは「ヒバ」等の如き常緑植物を以て造りたる敷臺の上に挿して、恰も卓上毛氈花壇のあるが如き感を起さしむるやう、適當に花を配置するのである、

其の五、花束 所謂贈花にして、盛花或は花籠の如き大形のものでない、花卉の種類及び花數も尠く、極めて簡單に造り得るものである、造り方は主に艶麗にして芳香を有する種類を撰び、且つ半開のものを用ひる、これ盛花、花籠等と大に異るところである、花束は携帶に便ならしむる爲成るべく小さく、大き一尺内外を越へざるを良しとする。「口繪參照」

其の六、襟插 洋服の襟鈕の穴に挿入して、一種の裝飾とすべきもので、歐米人の宴會に臨むに際して之を附着するを例とする、故に之に使用する花卉は薔薇香堇、「カーネーション」、「ヘリオトロップ」、「石竹」、「ゼラニウム」、「パンジー」、等

の如き、鮮麗にして芳香最も強きのを貴ぶのである、通常男子用の襟插花は一般小形で、女子用のものは少しく大形である、趣向は各異るにより種々の製法あれども、多くは花面を全部前面に表はし、裏面は葉を以て被ふのである、或は細長く造るあり、或は二三輪を無雜作に結束るものもある、而して花梗の部分は鉛紙を以て巻きつけ支へるのである。「口繪參照」

### 第二章 切花としての結束方

切花の需用として多くは插花用と佛花用とに用ひらるれども現今になりては此需用が一層多きを覺ゆるに至つた事は本章に詳説した通りである、而しながら従來東京市に供給しつゝある切花の數量の如きも甚だ少くないと思ふ、故に先づ此東京市に供給せる地方に就いて調査せし種類及結束方等に就き少しく述べて見よう。



其の一、結束の方法 切花を結束するには草本類と木本類とによりて多少其方法を異にする、即ち其用途に於て異なるが故であらう。

一、草本類にあつては種類によりて本数に差異あるもの、普通一握りを一把とする、而しながら種類によりては之れを二把若しくは三把を合せて一把となし（之れを稱してダキと云ふ）更に十八把若しくは二十四把を合せて結束て一束（ヒツトコレ）となす。

開花の早晚（蕾の多少）草丈、葉の多少等により上中下の三段に區別し、花物に在りては花蕾の頂端を揃へ、又葉物にありては切口（根元）を揃へ莖の中部及下部を葉又は蘭草を以て結束る。草本類の多くは佛花用に供せらるゝも其内一部は插花用として用ひらる、佛花用に供せらるゝものは莖及葉の多少損傷するも左まで差支へなきも、插花用に供するものは花蕾は勿論葉小枝に至るまで決して損せざる様に注意す、特に葉物の如きは葉を丁寧に巻き莖の下部を結束するを常とす。

其の二、木本類の束方 太きは五本より細きものは七本乃至は九本を一把とし之れを十二把乃至十八把を一束となし、結束に當つて小枝又は葉の外方に廣がつたものが、一々葉を以て幹に結び付け花蕾莖葉等の損せざる様最も注意して結束を行ふ。

今東京市へ搬出する切花の一把及び一束の把數を示せば次の様である。

其の三、草本類の束方

種類名	一把の本數	一束の把數	摘	要
金 花	十五本乃至二十本	十八把又は二十四把	荏原郡蒲田附近	一束は二十四把
鬚 子	三十本乃至四十本	同	千住附近	一束は十八把
飛 燕	十五本乃至二十本	同		
翠 菊	十本乃至二十本	同		



カーネーション	二十本	百	一期	八
矢車草	十本乃至二十本	十八把又は二十四把	咲	種
石竹(撫子)	二十本乃至四十本	同		
桔梗	七本	同		
兜菊	同	同		
夏菊(大菊)	十本(二把合せて一把)	同		
同(小菊)	三十本乃至四十本	同		
日々草	十本乃至五十本	同		
フランスギク	十本乃至二十本	同		
萬壽菊	二十五本乃至三十五本	同		
段菊	二十本乃至二十五本	同		
百日草	二十五本乃至三十五本	同		

濱撫子	二十五本乃至三十五本	十八把又は二十四把
小町草	二十本乃至三十本	同
水仙翁	二十五本乃至三十五本	同
金魚草	二十本乃至三十本	同
リナリヤ	三十本乃至五十本	十八把
千日紅	二十五本乃至三十五本	十八把又は二十四把
花菱草	十本	百把
カンパニユラ	五本乃至十本	十八把
スウキトピー	十本	五十把
ルーピナス	同	十八把
猩々草	十五本乃至二十本	十八把又は二十四把
カンデタフト	二十本乃至三十本	同

第二章 切花としての結東方



イ	同	ア	コ	虎	秋	モ	グ	鋸	射	紫
花菖蒲(早生)	同 (晩生)	ヤ	ス	の	菊	ント	ラ	の	子	苑
ス	メ	メ	モ	尾	菊	ア	ジ	こ	な	え
十本乃至五十本	同	同	二十本乃至三十本	七本	十本二把とし二把合せて	七本	オ	ま	き	ん
百	同	同	十八把又は二十四把	十八把又は二十四把	同	同	ラ	り	七本	本
把	把	把	把	把	把	把	ス	り	本	本

一〇  
 鳶尾とも云ふ  
 花の頂端を描へたばれ  
 る  
 切口を描へて結束る

ダ	カ	辨	姫	草	キ	天	夏	女	除	金	水
ー	ン	慶	紫	莢	リ	人	濱	郎	虫	鶏	水
リ	ナ	草	苑	竹	ン	菊	菊	花	菊	草	水
ア	ナ	草	苑	桃	草	草	草	草	草	草	水
十本	同	七本	十五本乃至二十本	同	十本乃至十五本	二十本乃至三十本	二十五本乃至三十五本	七本	二十本乃至三十五本	十本	十本乃至二十本
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
百	十八	十八	同	同	十八把又は二十四把	十八把又は二十四把	十八把又は二十四把	十八把	同	同	百
把	把	把	把	把	把	把	把	把	把	把	把

觀賞用種

房州産は俵入れ

第二章 切花としての結束方



切花としての結束方

丁 <small>ちやう</small>	牡丹 <small>たん</small>	白蓮 <small>はくれん</small> (泰山木)	山吹 <small>やまぶき</small>	梅 <small>うめ</small>	櫻 <small>さくら</small>	花桃 <small>はなもも</small>	ツルモドキ	梅 <small>うめ</small> モドキ	マンサク	スオ	ソナレ
七本乃至八本	一花又は五花	十本	十本	同	同	同	同	同	同	四シオリ	七本
十		同	十	同	同	同	同	同	同	十	十
八			八							二	八
把			把							把	把

其の四、木本類の本数

伊吹 <small>いぶき</small>	南天 <small>なんてん</small>	金雀 <small>きんせき</small> 雀 <small>せき</small>	種類
七本	五本を二把とし	五本又は七本、十本	一把の本数
十	十	十	一束の把数
八	二	八	
把	把	把	摘要

濱河 <small>はまがわ</small>	朱 <small>しゆ</small>	芍薬 <small>しやくやく</small>	黄 <small>き</small>	海 <small>かい</small>
菊 <small>きく</small>	骨 <small>ほね</small>	蘭 <small>らん</small>	薬 <small>やく</small>	仙 <small>せん</small>
五本又は七本	七本	七本	五本又は七本	七本
十	同	同	同	同
八				八
把				把



藤	朝	躑	夾	老	彼	李	ウ	椿	海	山	千
藤	鮮	躑	竹	梅	岸	櫻	ツ	榮	茶	花	兩
一	七	同	七本宛一把とし二把合せ	五本乃至七本を一把とし二把合せ	五本乃至七本	同	七本又は八本	七本乃至十本	三乃至四シオリ	七本乃至十本	五本又は七本
シ	本	同	同	同	同	十	同	同	同	十	同
オ	十	同	同	同	同	二	二	二	二	二	二
リ	把	把	把	把	把	把	把	把	把	把	把

紫陽花七本 十把

恁な工合に結束したものを籠又は菰包として市場へ搬出するのである。

### 第三章 切花としての収益

花卉の需用は年々歳々盛となつて十年前に嘗て見なかつた贈花として花輪なども今日では左程珍らしくない様になつた、而して之れを栽培する所謂供給者から見るときは其栽培の目的が収益であつて之れを培ひするとしたならば、只に目を樂ましますのみでなく、多少實利を本意として計算を立てなければならぬ、然るに従來に於て各種花卉の實利的収益試験様のものを未だ嘗て公にしたものを觀ない、之れは之等の目的の爲めに故に費したる試験を行つた處の當業者なり又は其他に於て爲し得ない事柄によつて其等の事業の未だ園藝社界に紹介されぬの



一六  
 である、本著に際しては東京府の農事試験場に於て最早数年間此目的の爲めに試験された成績のあるのを幸茲に各種花卉の一反歩に對して幾何の収益を擧げ得るかを掲げて斯界の爲め参考に供する。

種名	收穫期	一把の本數	收一反歩量	價ノ收獲額
鬚撫子	自五月二日至六月五日	四〇一五〇	三、三五〇把	七六、五〇圓
矢車草	六月九日	二〇一七〇	六、二〇〇	七七、九六
金魚草	七月七日	一五一四〇	六、一二〇	一一八、四一
花菖蒲	六月八日	一五、五二〇本	一五、五二〇	三七、七六
夏慶草	七月三日	七	四、七三〇	一一六、五八
ダリア	七月八日	一〇	二、〇七〇	六一、五〇
ア	七月九日	一	七、三八三〇本	二八、九九四

種名	收穫期	一把の本數	收一反歩量	價ノ收獲額
翠菊(春草)	八月二日至八月二二日	一〇一三	一、三二〇	五二、二八八
鋸草	七月二日	一五一二〇	七、六九〇	一一二、九二
桔梗	七月二日	七	三、二五〇	九三、二五
百日草	七月二日	一五、一五〇	九、七三〇	一六三、八〇
孔雀草	七月五日	二〇一四〇	八、九一〇	一三八、二六
孔雀草	七月二日	一	二、二三五〇	一八九、八四
カナン	七月二日	一	三、四九三〇	八七、〇九
モンテブレヤ	七月二日	七	六、七四〇本	六六、〇八
グラジラス	七月二日	一	四、二四〇本	八五、六二
濱撫子	七月二日	一	一、五八〇	四五、九四
紫苑	七月二日	七	二、五六〇	七〇、三二
秋菊(小輪)	八月三日	一	一、七九六〇本	一〇三、〇〇
秋菊(大輪)	八月三日	一	一、七九六〇本	一〇三、〇〇

第三章 切花としての収益



山查子	除虫菊(觀賞用)	アイリス(白)	アイリス(紫)	女郎花	夏濱菊	宿根天人菊	キリン草	草夾竹桃	姫紫苑	薔薇	金箋花
九八、二二三	五五、一六六	四四、三〇三	五五、二〇五	七七、二二三	七六、二五九	九五、二六一	七六、一七〇	七六、二九〇	九九、三〇九	五五、三一九	六五、二九九
	一五一四〇			七	二五一五〇	一〇一四〇本	一五一二〇	一〇一三〇	一五一三〇	一〇	二〇一三〇
二、一九〇本	一、〇二〇	一五、九〇〇本	一九、八〇〇本	一五、〇〇〇	四、六二〇	一二、七五〇本	二、八〇〇	六、〇〇〇	五、七〇〇	三、六〇〇	三、三〇〇
一六〇、五〇	三六、九〇	四〇、八〇	七二、六〇	三〇、〇〇	五九、二〇	二四、一五〇	三三、二〇〇	九〇、〇〇	一四、二五〇	八一、〇〇	三三、〇〇

スウ井ートビー	エニシダ	コレオブシス	三ツケスマス	宿根ルーピナス	マドリケリヤ
六五、二四四	二九、一八五	七五、二二七	九六、一三〇	七四、二二五	六六、一九三
	一〇	一〇一、二〇〇	一五一、二五〇	一〇一、一五〇	一五一、二〇〇
二二三、二五〇本	二〇、四〇〇	五、四六〇	四、四五〇	二、四〇〇	四、六五〇
四七、八〇	七三、二二〇	一一、二八〇	一一、五〇〇	一四、二八〇	一一、〇〇〇

之等の各種の中には球根植物あり、宿根草あり又一年草があつて只に花の收穫のみを以て計算の出來ぬ種類もある、即ち「ダリア」の如きは花を收穫した以外に球根の増殖に於ても少なからぬ實益のあることを思はねばならぬ、之等の球根又は宿根の價格は種類と需用との關係によりて大に其價格を異にするもので、一概には述べることは難いが、種類によつては花よりも尙多額の收益のあるもの



あらうと思ふ、「ダーリア」の如きは其種類さへ良種なれば確かに花の收穫以上であることは疑はぬ、依つて花卉栽培を以て収益を擧げようと思はゞ宜しく以上の各種の中に於て能く其種類の撰擇こそ肝要であらうと思ふ。

### 第四章 輸南向園藝植物

現今本邦産園藝植物にして外國人の嗜好に適ひ輸出せらるゝ種類及び數量も少なくなはない今其等の主なる種類を擧ぐれば次の様である。

其の一、輸南向觀賞植物種類名

イ、木本類

矮生檜類(ひば)。(矮柏)、盆栽、糸ヒバ。

躑躅類。サツキ、霧島、琉球、平戸、久留米。

椿類。山茶花。

牡丹。各種。

松類。多行松、萬代松、五葉松。

天王梅。

ビヤクシン。タチビヤクシン。

ジンテウキ。

イブキ。玉作、野立作。

紫陽花。

白蓮花。(泰山木)。

ゴムノ木。

丁子。

木瓜(ボケ)。寒木瓜。

ソナレ。



柗南天。  
 竹類。鬼笹、栲棕竹、觀音竹、姬金明竹。  
 金松(高野槇)。  
 ヒメコブシ。  
 藤類。  
 テマリ類。小テマリ。  
 櫛樹類。  
 梅類。  
 花櫻類。  
 南天類。  
 海棠。  
 花桃類。

百日紅。  
 蘇鐵。  
 天王木。  
 ドウダン。  
 柘榴類。  
 柘植類。草柘植。  
 ハツ手。  
 木犀。  
 杉類(矮生種)。百代杉、玉杉。  
 コ、草木類。

百合類。鐵砲百合、鹿の子、山百合、其他花百合の海外輸出高の約八割は鐵砲百合にして鹿の子百合の一割之れに亞ぎ山百合の五分透百合



其他を合せて五分とす。

羊出類。イノモト草、ヒリウシダ、シノブ、タマシダ。

山吹。

葉蘭。

花菖蒲。

風車草(テツセン)。

芍薬。

櫻草。

鷺草。

菊。秋大菊、同小菊。

福壽草。

ハ、果樹苗木類。

柑橘類。温州蜜柑、橙、金柑。

柿。

栗。

枇杷。

石榴。

李。

ニ、盆栽類。

矮柏(チャボヒバ)。

真柏。

扁柏。

松類。黒松、赤松、五葉松、落葉松。

槭樹。



杜松。

唐楓。

柘榴類。

丁子桂。

藤。

梅。

サツキ。

### 第五章 土壤

土壤には種々の種類ありて各其質状を異にして居る、花卉栽培には種々の土壤が必要であり、花卉の種類氣候栽培の目的等諸般の事情によりて選ぶべき土性に相異がある、然しながら花卉栽培は元來極めて集約なるものなれば、排水、客土

とか深耕、腐植質其他特殊肥料の施方等に依り、適宜人工を以て或程度迄は改善を加へ、希望の如くすることが出来る、殊に花壇、鉢植、苗床等に於ては殆んど理想的の培養土を調製して其目的を達することが出来るのである、されば栽培者は各種の土壤に就き、よく其性状を明にし、各種の花弁の好むところに従ひ、適當に其土質を選び、適當に其改良を行ひ、又適當の配合を以て培養土を造らねばならぬ、次に花卉栽培上最も必要なる數種の土壤に就き説明しやう。

其の一、埴土 土壤中最も細微なる粒子にして、通常六割以上の粘土質物と、四割以下の砂とを含有しておつて、極めて粘重にして耕鋤甚だ困難で、又植物根の伸延が容易ない、保水力強い、而して通常冷湿で空氣の流通が不良である、斯くの如く植土は極めて偏性なれば、埴土のみの土壤は植物の生育には不適當なれども、又水分及び肥料を吸収保有する力強く、一般に肥沃なるが故、他の土壤の改良又は盆栽、花壇等の培養土の一成分として常に缺くべからざるものである。



**其二、砂土** 砂土は八割以上の砂と二割以下の土とを含む土壤を言ひ、埴土と全く反対の性質を有て、水分、養分を吸収保有する力極めて弱く、常に乾燥し易く且つ養分の缺乏を來し易い、然れども氣水の流通宜しく、冷温共に速にして肥料分の分解盛なるが故、亦之を他の土壤に混ぜ 培養土の調製上屢々必要なるものである、殊に園藝上に於ては、挿芽床、發芽床用として常に缺くべからざるものである。

**其三、壤土** 壤土は砂土と埴土との中間に位するもので、砂と埴土との割合宜しきを得たるものである、壤土中埴土に近きものを埴質壤土と云ひ、砂土に近きものを砂質壤土と云ふ、又石灰質に富むものを石灰質壤土と稱し、腐植質に富むものを腐植質壤土といふ、壤土は恰も砂土と埴土との中間の性質を有し、兩者の缺點なくして何れの長所を兼ねたるが故各種土壤中生産力大なるものにて、農業上最も重要な土壤である。

**其の四、礫土** 各種土壤中最も粗粒状にして、直徑四密米突以上のもの八割内外を含むもので、これのみにては植物の生育上價値少きものであるが、排水の良好なると温熱の吸収力強きを以て、園藝上盆栽栽培の培養土の下敷用として必要なるものである。

**其の五、泥土** 池沼溝渠等の下底に沈積する土壤で、種々の有機質を含み、一般に粘重性である、之を總稱して粘土と云ひ、種々の肥養分を含有するが故、花卉培養土として廣く用ひられる、然れども此中には往々植物生育上有害成分を存することあるを以て、豫め乾燥したる上粉碎して使用することが必要である。

**其の六、培養土** 培養土は一名腐壤とも云ひ、苗床、温床、盆栽其他花壇等に缺くべからざる完全土壤とも稱すべきもので、之に依りて軟弱なる苗の育成を計り風土に適せざる花卉植物も或程度迄は自由に栽培生育せしめることが出来るのである、固より各種の植物は、其好適する土質養分を異にするが故、培養土も亦幾



分其調製方法を異にすべきものである、概言するならば培養土は膨軟にして輕鬆に失せず、氣水の流通良好であつて、而かも肥料成分に富むことが必要である。之を調製するには堆肥若しくは稿程、落葉等に土砂を混じて堆積し、時々積み代へをなし充分腐熟せしめ、更に其培養せんとする植物の性質により、或は埴土を混じ、或は砂土等を加へ、或は又特に肥料成分等を加へて充分混和したる後篩別するのである、例へば朝顔、菊等に於ては硬質の土壌を用ふるを可とするが故腐壤に四割内外の埴土を混和して更に遅効性の肥料を元肥として混合はして堆積すべきものである。

### 第六章 肥料

施肥は作物培養上甚だ必要なる事である、殊に花卉栽培に於ては比較的多量を要し、其材料も又概ね高價なるものである。

凡て作物が土壤より吸収する養分中、其生育上缺くべからざるものは數種あれども、土壤中には比較的少くして最も多く植物に需用せらるゝものは窒素、磷酸加里の所謂三成分である、三成分中結實作用に最も重要な磷酸は花卉に於ては其需用比較的少く、莖葉の發育に必要な窒素質の肥料分最も多く要せられる、加里も亦花卉栽培に於ては比較的其必要が多いのである。

施肥の方法は凡て二通りとする、即ち播種又は移植前に施すものを基肥と云ひ、花卉の生育中に施すものを追肥と云ふ、基肥は花卉の生長期の長短により適宜遅効のものを用ひ、普通磷酸質、加里質の肥料は此中に混用せらるべきものである、追肥は成るべく速効のものを用ひ、主として窒素質肥料を用ふるが常である、又追肥は成るべく稀薄なる液肥として數回に分て施用するを宜しい、殊に鉢植等に於て充分稀薄なるものを使用する必要がある、然らざれば往々植物根の損傷を招くことがある、左に花卉類栽培上重要な種類の肥料に就て述べ



よう。

其の一、人糞尿 本邦古來農家の最も普通に使用する重要肥料の一である、しかし取扱ひの不便と悪臭を放つことにより、家庭の娯樂的花卉栽培用の肥料としては稍々不適當の嫌はあれど、忍んで之を用ひんと欲するには夕刻を良とし、少しく土を掘り上げて施し、直に土を被せ置けば翌朝に至るまでには、大した臭氣を放たぬようになる、人糞尿は速効肥料で濃厚なるものではないが、新鮮なるものは幾分有毒物を含み、植物根を傷ふ虞があれば之を使用するには必ず肥料溜内に貯藏し、充分腐熟した後に施さねばならぬ、普通下水等を混じて二三倍に稀釋して使用するが安全である、人糞尿の成分は普通窒素を百分中に〇、六%、磷酸〇、一〇%、加里〇、二%、にして比較的窒素に富み、磷酸及加里に乏しきが故、加里を多く要する花卉には、適當に加里質を加用するに注意せねばならぬ。

其の二、堆肥 牛馬及其他畜類の排泄物及敷糞等を、刈草、落葉、稿稈等と堆積

腐熟せしめたるものにして、成分は材料により著るしき差異あれども、普通窒素が百分中に〇、四%、磷酸〇、一八%、加里〇、四乃至五%を含有で、且つ土壤の理學的性質を改良するに最も必要なる有機質を多量に含むが故、植物栽培の上には缺くべからざる肥料である、堆肥を調製するには、日光雨露に當らざる場所を選び、前記材料をよく混和して少量宛踏み固めつ、堆積し、時々下水又は人糞尿等を散布し、適宜の濕氣を保たしめ、又堆積中は各部腐熟の度合を一様にするため屢々切り返しを行ふ必要がある、堆肥は其分解徐々にして効力永續するが故通常基肥として用ひるものである。

其の三、油粕 油粕は薯苔、大豆、草綿、胡麻、落花生等種々の種實より、油粕に分を搾取せる残物の總稱なれども、其内最も主なるものは大豆油粕及び薯苔油粕にして、單に豆粕と言ふは大豆油粕又油粕と云へば薯苔粕のことを云ふ。

油粕は多量の窒素分に富み、悪臭を有せず、容積少く且つ乾燥てをるが故取扱



ひ極めて易く、家庭用園藝肥料として最も適當のものである、分解稍々遅きが故に堆肥に混じり元肥として施すか、又は豫め水に溶解せしめ、充分腐熟したる後薄めて追肥として施用するがよい、溶液の濃度は素より作物により異れども、一升の腐熟油粕は凡そ五斗乃至八斗に稀釋して使用するが適當である。

其の四、魚肥 魚肥は古來油粕と共に農家の最も重用したる金肥である、本邦に於ける魚肥の主なるものは、鯿及鱒より製せるもので、乾鯿及搾粕(粕)の別がある、搾粕は魚體より油分を搾取したる殘滓で、乾鯿は搾油せずして直に乾燥したものである、魚肥は肥効成分の外尚多量の油分を含有し、油分は肥効全くなく却つて其分解を妨げるものである、故に油分少き搾粕は、乾鯿よりも肥料の價值常に大である、魚肥は粉碎するか又は肥溜に入れ、腐熟せしめたる後施與せねばならぬ、全體の儘にて使用するときは、鳥獸等の爲めに貪食せらるゝ虞がある、魚肥は極めて窒素に富み加里に缺乏せる故、加里分を補ふ必要がある、草

木の灰を混じて使用すれば油分を分ち、腐敗を促進する効がある。

其の五、米糠 米糠は玄米精白の副産物であつて、古來磷酸質肥料として農家に重要せられたるものである、肥料成分は魚肥等に比し遙かに劣ると雖、需むるに易く取扱ひに便なるのみならず、磷酸分を含有すること多きが故、窒素成分に富める堆肥若しくは人糞尿に混すれば、適當に成分の配合を得て極めて有効である、米糠も亦單獨に使用する場合には、適宜の水を加へ肥溜中に腐熟せしめ、充分稀釋して施すがよい、又米を洗ふ際生ずる白水は、米糠と其成分同一にして取扱ひ便宜なれば、猥りに流棄せずして肥溜等に貯へ、腐熟せしめたる後灌水に混じて施すと大に効がある、一家數人の家庭より生ずる米洗水は、優に百鉢の植木を培養するに足るのである。

其の六、硫酸「アンモニア」 窒素質肥料として、濃厚且つ速効なること殆んど肥料中に比類がない、其百分中窒素を含有すること二十に達す、斯く濃厚肥料なれ



ば之を施用すには、百倍乃至二百倍に稀釋し、根本を少しく遠かつて施さねばならぬ、濃厚に過ぎると却つて植物の生育を害することがある、又此肥料は成るべく他の化學肥料と混じて施すを避くるがよい、殊に灰類と混じてはならぬ、然らざれば化學的變化を起し、肥料成分の損失を招く恐がある、硫酸「アンモニア」には往々偽造品若しくは有毒物を含むものあれば、購入する場合には充分吟味する必要がある。

**其の七、過磷酸石灰** 過磷酸石灰は磷酸質肥料として、最も有効なる化學肥料である、元來磷酸質は花卉栽培上あまり重要ならざる成分なれども、其生育上には缺くべからざる一成分なること勿論で、多少は必ず肥料として施與する必要がある、近年花卉に磷酸質肥料を施すときは、其生育を早め且つ花色を美ならしむると稱し、比較的少量に使用するに至つて居る、過磷酸石灰は堆肥と混じ基肥として與ふるを普通とする、然れども灰類との混用は溶解成分を不溶解に變じ肥効を

減削するからして避けねばならぬ、故に之が貯藏及施用に當りては、充分注意せねばならぬ。

**其の八、骨粉** 骨粉には粗骨粉と蒸製骨粉との二種ある、前者は骨の油分を除かず直に破碎したるもので、通常粗大なる粒子である、後者は生骨に蒸氣を通し、脂肪及膠質物を脱出したる後乾燥粉末としたるもので、通常細粒のものである、粗骨粉は油分多く粒大なるが故、分解困難で効顯が遅いが、蒸製骨粉は油分少く細粒なるが故、効顯が速である、故に花卉栽培用としては後者を選まねばならぬ、何れも少量の窒素を含んで居るが、主成分は磷酸である、磷酸質の肥料として施用せねばならぬ、乾燥せる粉狀物なるが故家庭園藝用としては適當なる肥料である。

**其の九、草木灰** 草木灰は古來本邦に於て魚肥、油粕類と共に重用せられた唯一の加里肥料で、稿稈、落葉、樹木、小笹等を燃焼せしめて灰化せしめたるもので



ある、故に其成分は窒素を含むことなく、主として加里、磷酸、石灰等である、草木灰の肥効のあるは、其加里と磷酸とは直接植物の養分となり、其石灰は土中に於て間接に効をなすものである。

草木灰を製するには、成るべく火力を強すぎぬよう注意し燻焼するのがよい、若し火力が強過ぎると磷酸の肥効力を減するものである、故に多少炭化物を含み黒色を帯ぶる位のもが効力多く、白色になりたるもの程効力が少い、家庭園藝用として最も必要にして、又最も得易く使用に便利な好肥料である。

## 第七章 花卉の管理

種子を播下し又は苗を移植したる後は、栽培者は之に保護を加へねばならぬ、一般に栽培植物は自然生のものに比すると羸弱なるを免れぬ、殊に花卉の如きは最も軟弱の生育をなすものであるが故、常に周到なる注意と保護が必要である、

これ等花卉に與ふべき保護の内主なるものは間引、除草、中耕、支柱、害虫驅除等である。

其の一、間引 間引は發芽後第一着の手入で、殊に園藝作物に必要な作業である即ち不良なる苗又は過剰のものを除きて、苗と苗との距離を適當ならしめ、残れる苗の發育を充分にするのである、花卉の種子は細微なもの多く、種子によつて其善惡を鑑別することが困難である、故に通常稍々多量に播下し、其發芽して苗となれるとき良好なるものを分け、不良なるものを除かねばならぬ場合が多い、故に間引は又外に選種の目的を兼ねて達することが出来るのである。

間引を行ふにはよく時期を見計らひ、一回若しくは二三回行はねばならぬ、間引の早きに失すれば苗の良否を區別するに困難である、遅きに過ぐれば必要なる苗の發育を阻害する、一時に間引を行ふと却つて風雨の害を蒙り易く、又花卉の種類によりては簇生を好むものがある、これ等の間引には其程度をよく考慮し



て行はねばならぬ、又間引の際根を抜き取るには成るべく静に丁寧にし、廣く土を動かして必要なる苗の根を損傷せぬやう注意せねばならぬ。

其の二、除草 凡そ雑草は其地の自然生植物である、常に栽培する花卉類より強健にして繁茂を逞ふするが故、花卉の養分を奪ひ且つ其繁茂すべき位置を横領し又日光、空氣の流通を阻害する、されば雑草は花卉の生育する間何れの時期に於ても防害なるのみならず、花壇等に於ては之がため著るしく其美觀を損するが故、常に勉めて之が除去を怠つてはならぬ。

花壇又は株間の除草には多くは手又は竹籠を以てし、花園、園路等には草刈鎌等を用ひる、間引と同じく花卉の根を害せぬやう注意して取らねばならぬ。

其の三、中耕 中耕は播種又は移植後、土地の固結せるを耕やして膨軟とし以て花卉根の發育を助くるのである、花園に於ては通常鋤を用ふれども、花壇盆栽等に於ては適當の器具を以て土壤を攪拌するに過ぎぬ、中耕は花卉の生長期に

よりて其深淺を加減し、特別の目的の外甚しく根を傷けぬやう注意せねばならぬ。

中耕は普通除草を兼ねて行はれ、又追肥の後に行ふを良とする、中耕の外花卉の根の露出又は動搖を防ぎ、或は沃土を根邊に與ふる爲め、土寄せと云ふことを爲ることがある、之も亦中耕の一と看做して差支へない作業である。

其の四、支柱 支柱は花卉栽培上最も重要な一作業である、多くの花卉は莖葉が矮小にして花の美大なるを貴しとするが故、開花の際輪冠の重みに堪えずして、莖梗の倒伏又は折傷することが少くない、故に此の如き花卉には必ず支柱を與へて其本來の開花を全ふせしめねばならぬ、又朝顔「スウ井トピー」等の如き蔓性の花卉に至りては、支柱によりて甫めて其生育を全ふし、花色を發揮するのである、支柱は花卉の性状により、時期により、又場所により、適宜之に用ふべき材料を選び、妄りに之を與へて却つて花の美觀を損するやうのことがあつ



てはならぬ、支柱の材料として普通に用ひらるゝものは、細芦、篠竹、割竹等にして、花冠、莖葉の大小に應じ適當に其大きさを撰び、又白色の割竹、芦等の花葉の色彩に相應せざる場合には、種々の染料を以て之を塗ることも必要である、殊に花壇、盆栽等に此必要がある、又結束材料には多く蘭類「ラファイヤ」麻繩等が使用せられる。

### 第八章 害虫驅除豫防法

總ての植物は殆んど害虫の害を蒙らぬものはない、就中花卉類は最も甚しいものである、加之す花卉は鮮麗なる花色と、馥郁たる芳香とを有するもの多きが故、昆虫類の集來を受け易い、此昆虫の中で其成蟲は害をなすこと少なければども、之に産附したる卵はやがて化して幼蟲となり多く蝕害を逞ふするものである。

害虫の種類は極めて多く、花卉によりて其種類及被害の程度を異にすれども、最も普通にして其被害の最も恐るべきものは次の數種である。

其の一、蚜蟲 之を細別すれば種類極めて多く、各々其侵害する植物を異にするものなれども、多くの植物に加害するものである、成蟲の形状は種々あれども概ね長卵圓形を有し、大なるものも七八厘を越へぬ、其幼時は淡綠色を呈し、成長するに従つて濃色に變じ、遂に翅を生ずる、春暖の候は單性生殖を以て盛に繁殖し、秋期に至れば雄を生じ、雌雄交尾して産卵し以て越年するものである、此蟲の繁殖は極めて旺盛迅速にして、凡そ一疋より一年間に増殖する數は實に五十有餘億の多きに達すと云ふ、故に其發生の初期に於て注意して驅除し、絶滅せねばならぬ、然らざれば忽にして其慘害を逞ふし、遂に栽培の目的を達することは出来ぬやうになる。

驅除法としては近來青酸瓦斯による燻蒸法行はれ、其効果著るしけれども、家



庭に於て栽培する僅少なる花卉の爲には少しく大仕掛なるが故、家庭園藝には到底應用することが出来ぬ、故に左に最も簡易なる驅除法の數例を示すこととする  
石油乳劑又は除蟲菊加用石油乳劑の四十倍乃至五十倍液を噴霧器を以て撒布する、害蟲少きときは刷毛又は筆等を以て塗抹してもよい。

朝露の乾かざる内又は噴霧器を以て灌水したる後、煙草粉又は除蟲菊粉を撒布するも宜しい、多量を用ふる必要ある場合には撒粉器を使とする。

強力なる噴霧器を用ひ劇しく灌水して害蟲をはね飛ばすも宜しい。

指先、刷毛或は筆等を以て害蟲を拂ひ落とし又は壓殺するも良しからう。

豫防法として附近の樹木雜草等に卵子の附着せしものあらば潰殺さねばならぬ又七星瓢蟲の如き蚜蟲を食する益蟲は勉めて之を保護すると同時に、蟻の如き蚜蟲の繁殖を助くる害蟲を捕殺することも必要である。

其二、夜盜蟲 夜盜蟲は其性最も豌豆を好み、豌豆に最も多く發生するもの

なれども、食物缺乏するに至れば種々の植物に蝕害を及ぼす、其幼時は晝夜を別たす加害すれども、漸次成長するに従ひ晝間は地中莖葉の蔭に隠れ、夜間のみ出で、喰害する、充分成長したるものは一寸五六分に達する。

驅除法としては夜間點燈して之を捕殺するか、又は晝間根邊を淺く掘り起し、其隱蟄せるものを壓殺するのである、又其成蟲の蛾は點火或は糖蜜を以て誘殺するも宜しい。

其三、根切蟲 夜盜蟲と同じく主に夜間植物を害す蟲で、體は暗黒色にして一寸四五分ある、一見土壤と區別し難い色をもつてをる、此害蟲は幼植物の根際を嚙り或は切斷して全く枯死せしめ、或は葉を喰ひ、時としては殘片を己の潜伏せる孔口に運び置くことがある、大抵加害植物の根邊にして、表土下五分内外の處に潜伏し、運動類る緩慢なるが故に掘り出して捕殺することが容易である、而し麥の芒を嫌忌する性あるが故、之を植物の根邊に盛り置くときは、被害を免



れることが出来る。

其の四、金龜子(こがねむし) 之にも種々あつて其習性各々異れども、其體形約三四分略卵圓形にして黒藍色の甲蟲である、種類により加害植物を異にすれども又一種にても種々の植物に害をなすものである、殊に「ダーリア」を好み其嫩芽を食し、其葉を網狀に侵害する、金龜子は翅を有するを以て自由に飛翔することを得れども、朝露の乾かぬ間は飛翔困難なるが故、被害植物を動搖して地上に落し捕殺するか、又は金盞其他適宜の器に石油を入れ置き、其内に拂ひ落すもよい。

其の五、瓜蠅 主に瓜類の葉を喰害する小甲蟲にして、大さ約二分許り、色は淡褐色にして五月頃より發生する、花卉中翠菊の葉の如きは特に其害を蒙り易い、自由に飛翔するを以て之を捕ふるには捕蟲網を使用せねばならぬ、雨露の尙未だ乾かざる時、或は風強き日は容易に飛翔せぬが故、斯くの如きときに捕殺する。

が最も効果がある、又除蟲菊、石油乳劑等を撒布し、南瓜の食用に供し得ざるが如きものを諸所に散布し置き、之に集れるものを誘殺するもよい、又「ナフタリン」を粉末となし之に等量の草木灰を混じ、朝露のあるうち、又は填霧器にて灌水したる後之に撒布し置くときは、「ナフタリン」の嗅氣を嫌ひ襲來せざるものである。

其の六、油胡蘆(えんまころうろぎ) 生長したるものは黒褐色にして體長八分内外に達し翅を有す、八月頃より十一月に亘りて發生し、時として嫩葉を喰害することあれども花卉栽培上には其喰害よりは寧ろ機械的に害を蒙ることが多いのである、秋播の苗床に侵入し、或は穴を穿ち或は歩き廻りて、種子の發芽を害するところが甚しいもので、播種後稿稈等を以て被ふときは一層襲來を招き易い、しかし播種後稿稈類を被ふて苗床の乾燥を防ぐは必要なる事なれば、成るべく捕殺することに勉めねばならぬ、即ち朝夕其運動の緩慢なる時、又は其近に瓜哇薯、西瓜



胡蘿蔔等の屑片を置き、其上に古莖或は葉の類を被ひ、之に集れるものを捕殺するのである。

### 第九章 園藝用具

花卉園藝は作業概ね周密にして、普通作物栽培に於けるが如き、特別な器具機械を要すること少く、有合せの材料を以て間に合はせることが出来る、然れども適當なる用具は頗る作業を便利にし、従つて其効果を充分ならしむる利益がある、故に家庭園藝に於ても、便宜にして然かも價格著るしく高價ならざる用具は備へ置く必要がある、今必要なる數種を左に説明しやう、

其一、移植鏝 大小種々あり、楔形の鐵板又は銅板を彎曲し、之に適宜の柄を附したるものである、花卉或は蔬菜等を移植するに當り、根に土の附着せる儘掘り取るに使用し、又鉢植とする際用土を掬ひ入れ、或は施肥するに當り其周邊

を掘り起し、又は表土を膨軟ならしむる等極めて便利なる用具である、普通鐵製のものにて一個二十錢位である。

其二、「ホーレーキ」 草掻き熊手兼用の装置にして、鐵、萬能、兩器の働きをする、即ち草掻は除草又は花壇等を淺く耕勸するに用ひ、熊手は除草したるものを掻き集め、或は耕勸したる表面を均手にする等、其用途甚だ廣き用具である。

其三、如露 如露は一般に使用せるものと異なることなく、鐵葉製、亞鉛製及錫製等あり、形狀大小も亦種々あるが、先づ一升乃至二升入りが最も便利である、撒出口は取り外し自在なるを良しとし、其形狀は蓮實形最も普通にして、半斜面の楕圓形、斜面三十度の楕圓形等種々あるが、花卉用としては斜面のものが使用且つ便利である、其撒出口は極めて細微なることが必要である、若し孔が大なれば水の注射は宜しきも、水勢の爲め幼植物を壓倒し、或は表土を固着せしむる虞がある。



其の四、鉄 種類極めて多きも要するに使用に便にして鋭利なるものを選べばよい、通常、剪定鉄、花切鉄の二種に區別し、剪定鉄は多く樹木或は硬質なる莖梢を剪るに用ひ、花切鉄は普通木鉄、或は花鉄と稱し、柔軟なる枝梢、草花等を剪截するに用ひらる。

其の五、移植熊手 移植する際或は肥料を施すに先ちて花卉の根周りの土を軟にし又は雜草を掻き取る等には缺くべからざる器具の一つである。

其の六、植木鉢 花卉を栽培してそれを眺めるにせよ又切花として實利を擧げらざることは今更申すまでもない事である、即ち微細なる種子の如きは露地へ直接に蒔き付けては其種子の發芽に大なる影響を以つてくる又幼苗の丁重に培養せなければならぬ如な種類又移植を嫌ふ様な種類等其効用の廣大なるは到底枚擧することとは出来ぬ、殊に温室内若しくは木框内に培養する花卉の如きはどうしても

此鉢によつて管理し取扱はねばならぬ、植木鉢の換りに箱等を代用することもあるが之れは極めて不經濟なことで木箱の如きは直に腐敗つて直に使用に堪えぬ様になるのみでなく、取扱不便で而も不體裁を免かれぬ、故に斯道には是非此植木鉢の備へ置くの必要を生じて來る、今園藝界に専ら使用されてをる植木鉢の種類を掲げると次の三通である。

イ、は普通に使用する處の素焼きの瓦鉢で大小種々ある、花卉の種類や取扱上の都合によつて其大小を定める大は一尺より各寸の徑を有してをる寸法のものがある。

ロ、通稱赤鉢と言ふて赤色の素焼きの赤鉢で上方に幅一寸位ひの縁を持つてゐて取扱上にも便且つ體裁も甚だ宜しい、而し前者に比べて價が倍乃至一倍半位する。

ハ、平鉢とか又は蒔鉢とか言ふて一尺平方位の大ききで深さは二三寸で底部に



二個の穴を穿ち排水の便を計つてある温室とか木框内にて極細微な種子とか又は貴重な種子を發芽させるには此鉢によらねばならぬ、故に此鉢に蒔きつけ其儘徐々に水の中に入れると底部の穴から吸水して適度の水分を保たしむることが出来る、之等のものは上面から灌水してはならぬ。

### 第十章 繁殖法

繁殖は總て植物を栽培する基をなすもので、殊に花卉の如く其栽培法の周密を要するものに於ては、一層の研究と熟練とを必要とする。

凡て繁殖法を大別すれば二種となすことが出来る、其一是種子を用ひて繁殖を圖る方法即ち實生法である、其二是莖、地下莖、枝芽根等種子以外の部分を以て繁殖を圖る法である、元來種子は植物が子孫繁殖の爲に生産するものなるが故、種子を繁殖に供するは最も自然の方法で又最も普通に行はれる方法である、然れ

ども多くの花卉の内には、人為陶汰の結果氣候の關係其他種々の事情の爲め全く種子を生ぜざるものがある、斯の如き種類には種子以外の部分を以て繁殖を圖る外ない、又種子によつて繁殖するときは、或は形質の劣變を來したり、或は其生育に多くの日數を要するものもある、斯の如きことを避けるには種子以外の繁殖法によるを利益とするのである。

種子以外の植物體部を以て行ふ繁殖法には、凡そ挿木、根分、接木、玉條の四法がある、就中花卉類には挿木、根分、の二法最も普通に行はれる。

其一、實生法 播種の方法、播種に直播 床播及盆播の三法あり、強健なる花卉類には大抵園地に直播すれども、特に移植を必要とするもの、氣候未だ低温なるに際し播種する必要ある場合、又は苗の幼稚なる間に保護を要することあるもの等は床播とし、苗を育成したる後植へ出すのである。

盆播は極めて微細なる種子又は極めて珍奇なる花卉等にして一層周到なる管理



を要する場合に行はるゝものである、又播種の方式としては撒播、條播及點播の三種あり、撒播は多く細微の種子に行はれ、條播は稍や大粒の種子に、點播は大粒の種子に行はるゝを普通とする。

イ、播種の時期、種子を播下すべき時節は、固より花卉の種類によつて異り、同一作物にても氣候の差異の爲め地方によりて等しくない、凡て種子の發芽には一定の温度が必要で、其温度の範圍内にも亦最も發芽に適する温度がある、之を最適温度と云ふ、通常花卉の種子も成るべく此最適温度に近きときに播下するを必要とする、然れども種類により又場合によりては、却つて發芽に稍々不適當なる温度の時を撰んで播くを利益とすることがある、殊に花卉類には異りたる季節に發育開花せしめて、其珍奇を賞することが必要であつて、特に温床其他の設備をなし季節に反して下種することがある、しかしこれは素人栽培家の遂に企て及ぶところではない。

播種期は花卉によりて異れども、多くは春又は秋に於てし、春期に播種するものは大抵彼岸より八十八夜頃迄を適期とし、秋期に於ては彼岸の頃より土用迄に播下するが多い、而して一般に云ふときは寒地に於ては暖地に於けるよりも、春秋共に成るべく早く播種することが肝要である。

播種の深淺、通常種子を播下したる後は土を覆ふものである、覆土の深淺は種子の性質、土質の乾濕、輕重、氣候の寒暖等によりて多少斟酌すべきものであるが、一般に種子の直径の二倍内外を標準とすべきものである、極めて微細なる種子は單に撒播したる上面を、輕く鎮壓するのみにて足るものもあるが、通常大小に應じ一二分乃至三四分位の深さとする、覆土は成るべく篩別したる輕鬆なる土を用ひ、小粒の種子には特に細土を篩ひかくる必要がある。其二、挿木法 挿木は枝梢、根若しくは葉の一部を切り取りて之を土中に挿し其發根するを待ちて苗とする方法で、簡單には普通の圃地に挿植することある



も多くは特に苗床を造り又は鉢に於て行ふ。

挿木床は適宜の大きさの木框（後章苗床参照）を据へ、内部に篩別したる砂土を凡そ四五寸の厚さに入れ、之を被ふに硝子障子を以てしたるものである、適當に截斷したる挿穂を砂中に挿植し、適當の温度と濕氣とを與へ、硝子障子の上面には菘又は葎實の類を被ひ、日光の透射を緩慢ならしめて發根を促し、常に框内の光線、温度、濕氣及通氣等に注意し、發根を催ふすに至れば漸次被覆を薄くし、追々強き光線に充つれば、通常二三週間の後充分發根するに至るが故、更に移植床に移して苗の健全を圖る、移植床は挿木床と略同様にして、稍々肥料分に富める壤土の少量を加へたるものである。「口繪参照」

露地に挿植するには成るべく輕鬆なる砂質地を選び、日光の直射を避くる爲め葎實又は菘の類を以て上部を被ひ、常に適度の水濕を保たしめるのである、一般に梅雨期は挿木を行ふに最適當である。

其三、株分法 根分け又は株分けは一時に多量の苗を得ること困難なれども、

生着確實、生育旺盛、作業容易なるの利益がある、諸多の宿根草は此方法によることが多い、時期は一般に春期を適當とすれども、又秋季に行ふものもある。

根分けの方法は、花卉の種類によりて多少異れども要するに分割せる各部が發芽、發根に差支へなきやう力を用ひて切離し、又は單に手を以て分割するのである、球根類の如きは各球皆芽及根を有するが故、分割極めて容易なれども、天然牡丹の如き塊莖は分割に注意して、一塊必ず一芽を有せしめることが必要である、一般に根分は發芽前若しくは落葉後行ふべきものなれども、時としては已に發芽生育中のものに行ふことがある、斯の如き場合には、栽植後灌水、日覆等を設けて保護を加ふる必要がある。

其の四、採種法 花卉の繁殖を適當に行ふには、其基とすべき種子種根の善良なるものを選びねばならぬ、故にこれ等の採取には又特殊の注意を要するもので



ある、花卉によりては單に栽植したる花園又は花壇より採取し得るものあれども、或は特に種圃を設けて之に栽植し、保護を加へねばならぬものである、今採種上一般に通ずる注意事項を左に述べやう。

採種用に供すべきものは、病虫害の虞なく、空氣日光の透通よろしき場所にて良好なる發育を遂げしむることが必要である。

他種と交雜し易き花卉は成るべく交雜の恐なき場所に栽植するか、又は花に被覆を行はねばならぬ、花の被覆には紙又は寒冷紗がよい。

採種用の株には特に燐酸質及加里質肥料を適宜加用する必要がある、これ枝幹の發育を堅實にし、結實を良好ならしむる爲である。

花瓣萎凋して散下し難き花卉の種子は、往々成熟を妨げられ、時として腐敗を來すことあれば、特に花瓣を摘除する必要がある。

種根又は種球の採種用のものには、地上部の生育を抑制して種用部分の發育を

圖る必要がある、又種實採取に於ては特に肥大なるものを得んとするには、摘花を行ひて結熟すべき花を制限することがある。

採種用の株は成るべく支柱を設けて倒覆を防ぎ、又標札を附して種類の混肴を避けねばならぬ。

種子の調製は株より直に採取するものあり、或は株を刈り取り陰乾或は陽乾して採實するものもある、何れにしても種子を充分乾燥せしめることが必要である、しかし細微なる種子若しくは纖弱なる種子は、夏季の烈日にて乾燥すれば往々發芽力を失ふことがある、故に鉢力或は金屬製等の器の上にて乾すことは避けねばならぬ、採種調製したる種子は、乾燥して空氣の流通よろしく且つ温度の變化少き場所に貯藏するが宜しい。

又球根塊莖等の如きものは、多く其莖葉の枯れたる後掘り上げて貯藏すべきも天竺牡丹の如きは降霜せざれば枯ざるが故、適宜根元より莖を付けて切り取り、



探掘して濕潤ならざる土中に埋め置くのである。

### 第十一章 花粉媒助

凡そ植物の種子は、花中雄蕊を有する花粉が雌蕊の柱頭に附着して茲に受精作用行はれ、初めて結實するものである、花粉の雌蕊に附着するは多く昆蟲及風の媒介によるものである、花卉類の如く花冠鮮麗なるものは、必ず蜂虻蝶蛾類の襲來を受くるが故、露地に在るものは自然にこれ等昆蟲類の媒介に待つものが多い然れども温床温室等に栽培せらるゝものは、昆蟲の來ること困難なるが故、人工を以て之が媒助を行はねばならぬのである。

又露地に在るものに於ても、種類の交雜を恐るゝ場合、又は特に新種を作出せんとする場合には、常に人工媒助を行はねばならぬ。

元來花には雌雄兩蕊を一花中に有するものと、兩者花を異にするものとある、

雌雄異花なるときは雄花の花粉を取りて雌花の柱頭に移さねばならぬ、又雌雄同花なる場合に於ても成るべく他花の花粉を以て受精せしむる方結果が確實である花粉の媒助には簡單には、「ピンセット」の如きものにて雄蕊の葯（花粉囊）を摘み、其花粉と雌花の柱頭に觸接せしむればよいのであるが、種類の交雜を恐るゝもの又は特に新種作出の目的を以て他種の花粉を媒助する場合には、開花に先ち花を切開し、目的の花粉を柱頭に移すか、又は開花の前より袋を被ひ、目的以外の花粉の受精を避け置き、開花の後目的の花粉を移すのである、又雌雄同花のものには自花受精をなし易きが故、豫め蕾の時に於て之を切開し、其雄蕊を除去し置く必要がある。

歐米に於ては新種の育成盛なるが故、人工媒助も従つて盛に行はれ、之に要する特殊の器具の如きも販賣せらると云ふも、素人栽培に於ては單に有り合はせの「ナイフ」及び「ピンセット」位を用ふれば足るのである。



### 第十二章 苗床及移植法

其の一、苗床 苗床は種子を播下して苗を育成するのみならず、挿木など種によらざる繁殖も亦苗床に行ふことがある。苗床は之が構成上大別して冷床と温床との二種とすることが出来る。

イ、冷床は簡単には唯乾燥にして日向よき場所を選び、土壤をよく耕碎し適當に施肥したるものであるが、少しく周密を要する場合には、四圍を藁、菘等を以て圍繞し、特に其北側には寒風を遮る装置をなし、夜間及寒き日には、晝間にも床の表面に菘等覆ふて熱の放散を防ぐようになしたものである。

ロ、温床は人工を以て温熱を供給する苗床にして、之が発熱物としては通常馬糞、落葉、藁稈等の有機物を堆積して醗酵せしめ、其間發生する熱を以て床内を暖むるもので、一層周密を要する苗の育成に使用する、其構造管理等に就て

は項を改めて説述する。

其の二、移植法 苗床に播種して育成したる苗及挿木、接木等によりて繁殖したる苗は、適當の時期に圃地又は園地に植へ出さねばならぬ、又成長中の花卉も時としては移植することがある。

移植を行ふときは、植物は必ず多少其細根を傷けられ、爲に土中の水分を吸収する機能が衰へるものである、然るに葉より水分を蒸散する機能は移植前と毫も異らざるが故、吸収する水分を發散する水分との間に均衡を失し、爲に植物は多く萎凋の現象を呈するものである、萎凋の度の甚しくないときは、移植によりて受くる害は少いが、其度甚しきか又は久しきに至るときは遂に枯死するに至ることがある。

然れども特に移植を好む種類あり、又必要とする場合がある、移植は細根を損傷するも之が爲更に多くの細根を發生し、苗をして一層強剛い生育を遂げしめる



効がある、故に苗床に育成中の苗には時々移植を行ふ必要があるものがある、移植に當りて注意すべき要項を擧ぐれば次の如くである。

イ、移植の際は成るべく根の損傷を防ぐ爲め、苗を丁寧に掘り採らねばならぬ花卉の種類によりては却つて多少根の切断を必要とするものがあるけれども、一般には損傷を避けて其安全を圖る必要がある。

ロ、移植後はよく苗の根邊を鎮壓し、根と土壤とを密接せしめねばならぬ。

ハ、移植したる苗の根邊には、稿稈類を散布し、又苗の上部に覆蓋を施し、以て根邊の土壤及莖葉よりする水分の蒸發を防ぎ、苗の萎凋を防がねばならぬ。

ニ、移植は成るべく無風にて曇天のとき、又は夕刻等に行ふことが必要であるこれ亦苗の萎凋を防ぐ爲である、而し雨後又は小雨の外降雨前は宜しくない。

ホ、鉢植又は苗床より苗を植へ出す前には、豫め灌水し置き、又移植を終りたる後も根際に灌水して、水分の蒸發を成るべく少からしめる必要がある。

### 第十三章 温床

花卉栽培に使用せらるる温床は、主として寒氣の害を蒙り易き球根、宿根類の越冬、其他普通露地にて栽培困難なる種類、又は他より開花を早からしむる場合等にして特に加熱して使用することは少い。

温床の構造は、通常巾四尺長さ一丈二尺の木框にして、前部の高さ八九寸、後部の高さ一尺六七寸あり、其四隅及前後側の中央に各二寸角の柱を附し、框の上へ面三尺毎に幅一寸五分、厚さ一寸二分の角材を前後に架し、其上に幅三尺の障子四枚を蔽ふたるものである。

板は通常厚さ一寸内外にして杉若しくは檜材を最良とする、障子は外框の内に縦に二條の支材を架して骨子となし、其間に九枚若しくは十二枚の硝子板を嵌入し、各硝子板の合せ目は約四分位となし、「バテ」を以て骨子に接着せしめたるも



のである、又障子の開閉の度を適宜に定むるため、通常「コマ」と稱する鋸齒状の支具を備へねばならぬ。

以上の如くして調製せられたる木框は、南面にして成るべく温暖乾燥なる場所に据へ附け、高温を要せざる場合には醸熱材料を用ふることなく單に排水を良好ならしむれば足る。

又高温を要する花卉を栽培するには、人工を以て温熱を給し、所謂温床を構成するのである、今温床の構成法及其管理法の概要を述べれば次のやうである

其の一、給熱法

温床の熱源は通常醸熱物による、醸熱物の材料は落葉、塵埃、

枯草、糞穉等、新鮮なる厩肥、米糠、鋸屑及下水又は人糞尿等である、右の内厩肥、枯草等は分解すること比較的速にして、一時に高温を發し永續することが出来る、之に反して落葉は分解緩かなるを以て發熱は低きも、其熱を比較的永續せしめることが出来る、故に發熱急激なる馬糞や敷糞等の作用を緩和するに最も都合がよい、其他米糠は急激に高温を發するが故、他の發熱緩慢なる材料に加へて發熱を補助するに適し、下水、人糞は醸熱材料に適當の濕氣を與へ、踏込後酸酵を起すに便ならしめるのである、塵埃、糞穉類は其品質によりて成分に差異あるけれども概して急速に發熱して之を保持するに困難である、家畜の排泄物中温床材料として最も適當なるは馬糞及其敷糞等であるけれども、牛、羊、豚等の厩肥も亦良好なる材料である。「口繪参照」

イ、床溝 温床の溝の深さは醸熱材料の厚さに應じ、又廣さは木框と略同しきか又は稍々大なるを普通とする、溝の周縁部は常に内部より深く掘り下げ、特に其前側即ち南方を一層深く掘り下げる、然るときは溝の低は中高となり、稍々蒲鉾形を呈するのである、之は醸熱物の厚さを床の外圍に於て厚くし、常に中央の高温に失し易き虞を防ぐ爲めである。

ロ、踏込み 床溝が出来上れば醸熱材料の踏込みを行ふ、最初に粗大なる材



料を溝の底に敷きて排水に便して置き、次に豫め諸材料を充分に攪拌混和したる醸熱物の一部を床内一様に投入し、丁寧之を踏壓し、更に又一部を投入踏壓し、斯くの如く反覆數回にして豫定の厚さに達せしめるのである、此踏壓に當りて注意すべきは、溝の中央部に於て密にして周邊に於て疎薄となり易く、従つて温度の不均一を來す虞のあることである、又踏込が余り密に失すると温度の持續には都合がよいが發熱困難である、疎に過ぐれば發熱速かなるも温熱永續し難き不利がある、又醸熱材料が乾燥して發熱が遅いときは、之を速かにするため下水又は人糞尿の稀薄なるものを踏込み毎に適宜注加するとよい、醸熱物の厚さは種々の事情によりて異なるが、通常一尺—一尺五寸位である。

ハ、作土 以上の如くして踏込みを終れば播種又は苗を移植すべき作土を入れ、初め木葉腐壤等の如き膨軟多孔の材料を敷き、其上に前年使用したる作土及醸熱材料等の充分腐敗したるものを篩ひ込むのである。

ニ、床内の温度 醸熱物が床中に於て分解を初めると多量の熱を發生するがため、床温も劇昇するが一二日にして稍々降下し、凡そ一定温度の持續せらるる様になる。此時に苗の移植又は種子の播下を行ふのである。花卉の種類によりて其發芽發育に要する温度は異なるが故、各種に適應する温度を發し、必要なる期間之を持續するよう醸熱材料の配合及踏込みの厚さ等を適當に考慮して行はねばならぬ。

ホ、床内の灌水 灌水は其當を得ぬと作土を固結せしめ、又床温を急變せしめる、其量が多きに過ぐれば醸熱を妨げるのである、灌水は成るべく午前中行ひ夕刻を避けねばならぬ、夜は床内の温度が降下するを以て夕刻灌水するときには更に温度の激降を來す恐がある。

灌水の度合は之を一定することは出來ぬが、通常一回灌水したる後は床内の乾燥するまでは行はぬものである、水は葉上より注ぎて差支なきも、莖葉軟弱に



して日傷し易きものには避けねばならぬ。

七〇

へ、床内の換氣及日蔽 床内の乾燥を圖り且つ温度を調節するため、屢々通風を行ふ必要がある、又床内には多量の水蒸氣や、炭酸瓦斯を發生し、苗の發育を害するからこれ等を發散せしめることも必要である、換氣は天氣並に床内の狀況に應じて適宜に障子を開くのであるが急劇に行ふてはならぬ、殊に曇雨天の續いた後俄に晴天を見る時など、急劇に換氣を行ふて葉の萎凋を來し、遂には枯死することがある。

日蔽は日光の照射を加減し、苗の萎凋を防ぐ爲めに必要である。不良なる天氣の後急に日光を直射せしむるときには、換氣に注意すると同時に、日蔽をして其萎凋を防がねばならぬ、又花卉の種類によりては強き日光を忌むものもある、殊に開花中の如き光線を微弱にして、其花期を長からしむるのである。夜間及降雨のため氣温低き日には、菘又は蓆の類を以て上面より框を覆ひ、以

て床内温度の維持を圖らねばならぬ。

## 第十四章 土 窖

本邦花戸の古來より用ふる温床、所謂窖なるものは土窖である、之によつて寒氣に堪え難き花卉類を越年せしめたもので又促成所謂室咲なるものを栽培したものである。

土窖を設へるには地勢高燥にして日當りよく、地盤の成るべく堅き場所を選び、深さ三四尺、廣さ適宜の穴を穿ち、北側より片屋根を作り、南面を出入口として之に油障子を嵌入し、専ら陽光により温度を取るものである、設備簡單なるも地下に在るが故、比較的溫度の激變なく、一月の候より已に梅花福壽草の類を開花せしむることが容易である。



### 第十五章 温室

温室は温床の一層進歩したるもので、高等園藝の最必要なる一機關である。屋根及四壁、悉く硝子板を以て建設し、以て陽光よりする温熱を吸收保護せしめ、尚ほ蒸氣鐵管、煙管又は暖爐等を以て温熱の供給を圖り、且つ室内の温度を自在に高低せしめる設備を施したものである。故に此中に於ては熱帶其他異風土の高  
 等なる觀賞植物を自由に栽培することを得、又季節にかまはず任意に開花せしめることが出来る。

然れども斯くの如き設備並に運用には、非常に多額の費用を要するが故、到底普通園藝家の企て得べきものでないから、茲には素人園藝家のため、極めて小規模にして簡易なる設備の温室に就き少しく述べることとする。

温室の種類 温室は栽培すべき植物の性質によりて各々異りたる設備を要す

るものである。今之を大別すれば次の三種となる。

其の一、綠室 冬季の氣温にて生育し難き植物を栽植する温室で、主として硝子板の吸收する温熱によりて植物を保護し、特に火力等を用ひざるものである。

其の二、中帶室 多くは温帶地に生育する植物を栽培する温室で、綠室より一層高温を要し、通常火力を用ひて保温するものである。

其の三、熱帶室 熱帶地の植物を栽培する室にして最も高温を要し、常に火力を用ひて保温し、以て其生育を全からしめるのである。

其の四、温室の位置 いふ迄もなく最も日當りよく、乾燥にして北面を遮蔽せる位置を撰まねばならぬ。

其の五、温室の構造 温室の構造は主として栽培すべき植物の目的により又他の建築物との配置によりて異なるも、凡そ使用し得べき經費の程度に應じ、片屋根式、半鞍形屋根式若しくは鞍形屋根式の何れかを撰ぶべきである、片屋根式



は最も簡單にして費用も少く、半鞍形式之に次ぎ、鞍形式は最も多額の費用を要するものである。

給温の最簡易なる装置は火爐である、木炭又は「コークス」等を燃焼して直接室内の空気を温暖ならしむる方法で、成るべく煤煙の發せざる材料を撰んで燃料とせねばならぬ、次には、爐である、一般室内用と同一のものを用ひ使用前より一層便利である、然れどもこれ等の方法は、其保温力甚だ不確實にして到底温度の均一を望むこと能はず、従つて非常の繁勞と注意とを要するのである。

煙管は少しく設備を要すれども、前二者より其効力大である。即ち一定の竈に於て石炭若しくは木材等多量の煙を發生する材料を燻焼し、其煙を鐵管を以て室内に導いて、給温するのである、元來煙は最初甚だ高温なるも其冷却迅速なるが故、長距離の鐵管を備へたる温室には適せぬのである。

湯管は温湯の周流性を利用し鐵管内を絶へず熱湯を環流せしめるのである、即

ち湯管の一部より鐵管を發し温室内を一周し來りて他部に歸着せしめ、湯鑪に絶へず火力を加へ、熱湯をして常に鐵管内を環流せしめて室内を暖むるのである、蒸氣管は湯管の熱湯に代ふるに蒸氣を以てしたるもので、今日行はるゝ温室の保温として最も完備したるもので、其効果最も優良である。然れども其設備には多額の費用を要するものである。

### 第十六章 花壇

花卉を栽培するに當り、各種の花卉をして最も遺憾なく其美觀を發揮せしむるには、花卉の種類、性状及び色彩等に從ひ、花壇植となすに如くものはない。

花壇の設計は花卉の種類、位置及目的によりて各々異なるものであるが、從來吾國に於ては花壇と稱し來りたるものは、單に土地を長方形に劃し其周圍に芝又は木石等を繞らし、周圍の地面より少しく高く土を盛り、之に種々の草花を栽植し



たるものに過ぎなかつたが、近來西洋園藝術の輸入せられ、漸次新式なる花壇の設けらるゝに至つた、完美したる花壇は種々の材料設備を要する外、又特殊の技術を要するが故、從來富豪家の娛樂以外には廣く行はれなかつたが、園藝趣味の發達に伴ひ、一般の家庭にも漸次行はるゝに至つた、又簡單なるものは何人とも雖容易に之を設けて觀賞を恣にすることを得るが故、左に簡易なる花壇の設計に就て述べやう。

花壇の種類 花壇を設くるには、場所、花卉の種類、期節及其目的等により其方法、様式を異にせねばならぬ。其主なるものを擧ぐれば左の如くである。

其の一、毛氈花壇 圓形、楕圓形、方形若しくは長方形にして大小種々ある。矮性にして同一時期に開花すべき各種の花弁を撰び、其色彩により種々の模様形を現はすやう適宜に配列して培植し、恰も毛氈を敷き詰めたる如き觀を呈せしむるものである。

其の二、彩色花壇 草丈け凡そ一様なる各種異りたる色を有する花卉を密植し地面を表はすことなく、一面花を以て被はしめ、恰も彩色したるが如き美觀を呈するのでも、圓形、楕圓形又は方形等に形どるのが最も普通である。

其の三、リボン花壇 建築物の周圍若しくは道路に添ひたる場所及花壇と、花壇との連續せる場所等に細長く設け、之に矮性なる種類の花弁を整植したるものである、而して花卉の配列法は「リボン」形に沿ふて條線に植ふるか若しくは蛇行狀等に植へ付けるのである。

其の四、壇彩花壇 生垣、塀及常綠樹等に沿ひたる場所に設くるものである。即ち生垣に沿ふて他の花壇との調和を圖り、或は他の花壇の背景を一層密接になさんが爲め設くるものである、此花壇には多くは後方に草丈け高き種類を配置し前方に至るに従つて漸次矮性種を植うるもので、他の花壇と異り開花の期節等に關せず、成るべく密接するがよい。



花壇に花卉を配列栽植するには、通常中央に常緑葉の一種を植え周囲に至るに従ひ漸次草丈低き種類を置くものである、又花色の配合は最も注意と熟練とを要し、同一の色彩を同一の花壇の各所に配植するが如きは最も忌むべきことである然し特に同一色の對照を要する場合は此限りではない。

## 第二編 各論

### 第一章 花卉栽培上の分類

花卉を栽培するに當りては先づ其種類の特性を知悉する必要がある、即ち此種類は耐冬性であるか、或は多年性であるか、一年草であるとか、或は春播すべきものか秋播すべきものであるか、或は又移植に耐へるものか耐へぬものか等、各其特性を明にし之に従つて適當なる栽培法を採らねばならぬ。然らざれば折角の珍花名草も徒らに萎凋枯死に至らしむるであらう、されば初心者爲に各種の花卉に就き其栽培法を細説するのであるが、先づ栽培上の便宜の爲め總ての花卉を左の四種に大別し、各種の特性を表示することとする。

其の一 球根植物

其の二 多年性植物



其の三、一二年性植物  
 其の四、一年性植物

其の一 球根植物

種類名	科名	品	種	栽培期	開花期	草丈
ヒヤシンス	百合科	白、赤、紫、濃紫の八重、一重	秋	四月	五月	五寸八寸
チユーリップ	同	黄、赤、織、淡紅絞りの八重、一重	同	同	同	五寸一尺
トリトニア	同	白	同	四月	五月	三寸一四寸
アネモネ	毛茛科	白、赤、紫、藍、淡紅の八重、一重	同 但し春秋播種	三月	五月	五寸一六寸
鐵砲百合	百合科	早生、中生、柳葉、黒軸	秋	六月	七月	八寸一尺
鹿の子百合	同	赤、白、丸葉、黄蜂の雪	同	七月	八月	二尺一三尺
重代百合	同	赤、黄	同	同	同	一尺五寸二尺
山百合	同	山百合、白黄、紅筋口紅、白黄、作百合	同	同	同	二尺一三尺

グラジオラス	鳶尾科	白、赤、淡紅	春秋	同	同	二尺一四尺
モリトプレテリヤ	同	赤、樺	秋	同	同	二尺一三尺
ラナンキユラス	毛茛科	赤、絞	同	三月	四月	五寸一尺
スノードロップ	石蒜科	白の八重、一重	同	自十二月至二月	同	同
リュウゴンス	同	白、赤、黄、紫	同	三月	四月	八寸一尺五寸
チグメシヤ	鳶尾科	赤、黄、樺	春	七月	八月	五寸一尺
エキシヤ	同	白、赤、黄、絞	秋	四月	五月	三寸一八寸
パピヤナ	同	赤、黄、樺	十月	三月	四月	同
チユベローズ	石蒜科	白、黄	春	十月	十二月	一尺五寸一三尺五寸
海芋	百合科	白、黒、黄、赤	春秋	六月	七月	二尺一四尺
カナン	曇華科	黄、赤、絞	四月	七月	十一月	三尺一五尺
ジンジャ	薑科	白(有香)	四月	九月	十一月	三尺一四尺

第一章 花卉栽培上の分類



種名	品名	播種期	栽植期	開花期	草丈
花 菖蒲	紫、白、絞	春秋	六月-七月	二尺-三尺	
花 薔薇	紫、白、絞	春秋	六月-七月	二尺-三尺	

其二 多年性植物

ト	パンクラチウム	オーニクグラム	サキ	カロコータス	アキメネス	グロキシニヤ	球根ベコニヤ	シクラメン
同	同	石蒜科	蘭科	百合科	毛茛科	苔草科	秋海棠科	櫻草科
朱、黄	白	白	白	白、淡紅、黄	赤、紫	白、紫、赤、黄、絞	白、赤、黄、淡紅	白、赤
十月	四月	四月及九月	九月	秋	同	同	春	四月
六月-七月-八月	六月-七月	七月-八月	五月-六月	五月-六月	八月-九月-十月	八月-九月	五月-六月	六月-七月
二尺-三尺	五寸-一尺	五寸-八寸	五寸-一尺	五寸-一尺	五寸-一尺五寸	五寸-一尺	五寸-一尺	三寸-五寸

ダ	オキザリス	佳香(ホリアンサス)	支那水	八重水	口紅水	喇叭水	アマリ	サフラン	フリージャ	夏水仙	コルチカム
菊科	酸漿草科	同	同	同	同	同	石蒜科	同	同	鳶尾科	
重、菊咲、及狂咲、八	白、赤、白、黄、緋、絞、濃紅等の一重、八	白、赤	白、黄	白、黄	白、黄	白、黄	白、赤、絞リ	白、紫、赤、絞	白、黄	白	白
四月-五月	四月	同	同	同	同	同	四月	春秋	十月	春秋	九月-十月
六月-七月-八月	六月-八月	三月-五月	一月-三月	同	同	同	六月-八月	十一月-十二月	三月-四月	八月-九月	十一月-十二月
二尺-六尺	三寸-五寸	八寸-一尺二寸	同	同	同	同	一尺-二尺五寸	三寸-五寸	五寸-一尺	三寸-五寸	四寸-八寸



龍舌蘭科	アスパラガス	香堇	セントポーリヤ	櫻草科	ランタナ	ヘリオトロープ	カラジユーム	ペラゴニユーム	ゼラニユーム	蜀葵	紫苑
同	観葉植物	白、赤、紫、八重、一重	紫	白、赤、八重	白、赤	紫、白、赤	観葉植物	赤、白、絞	赤、白、淡紅、絞、八重、一重	赤、白、淡紅	淡紫
同	同	秋	春	春秋	同	秋	同	同	春	春秋	秋
同	同	同	同	同	同	同	同	同	春	同	秋
		十二月 - 二月	九月 - 十月	四月 - 五月	九月 - 十月	八月 - 九月	年中	年中	年中	八月 - 九月	八月 - 九月
二尺 - 三尺	蔓性	三寸	三寸	五寸 - 一尺	五寸 - 二尺	五寸 - 二尺	一尺 - 二尺	一尺 - 二尺	一尺 - 二尺	二尺 - 五尺	三尺 - 五尺

秋	夏	寒	牡	芍	オ	鳥	福	射	庭	イ	漢
					タ		壽		石	リ	
菊	菊	菊	丹	藥	キ	頭	草	干	菖	ス	蓀
同	同	同	同	同	同	同	毛	同	同	同	同
							茸				
白、紫、絞	黄、紫、赤、白、絞	紫	黄、赤、絞	黄、白	同	白、紫、赤	黄、白、赤	黄、赤、絞	紫	絞	白、紫、絞
同	秋	春	同	春	春秋	春秋	春秋	秋	同	同	春
同	秋	春	同	又落花後 又ハ秋	同	秋	同	同	同	同	春、秋
十月 - 十一月	六月	十一月 - 二月	五月 - 六月	五月 - 六月	五月 - 六月	九月 - 十月	三月 - 四月	七月 - 八月	五月	六月	五月 - 六月
二尺 - 三尺	一尺 - 二尺	一尺 - 二尺	一尺 - 三尺	一尺 - 三尺	一尺 - 二尺	一尺 - 二尺	五寸 - 一尺	二尺 - 四尺	月三寸 - 一尺	月一尺 - 一尺五寸	二尺 - 三尺



フクシヤ	虎の尾	姫コリウス	草茨竹桃	サルビヤ	アルターナンセラ	アルメリヤ	美女櫻	勿忘草
柳葉菜科	人參科		花荵科	唇形科	苧科	磯松科	馬鞭草科	紫草科
形白、赤、紫、奇	紫、白	濃紅、黄絞リ	赤、白、黄、淡紅絞、八重、二重	赤、白	紅、紫	赤、青、紫、絞	淡紫、赤	白、赤、黄、紫
灌木	秋	同	同	春	秋	同	同	春秋
春	春秋	春	同	春秋	春秋	同	春	春秋
六月-七月	七月-八月	觀葉植物	四季	七月-九月	八月-十月	觀葉植物	五月-六月	八月-十月
一尺-五尺	一尺-二尺	一尺-二尺	一尺-五尺	二尺-三尺	一尺-二尺	三寸-五寸	三寸-五寸	五寸-一尺五寸

カーネーション	石竹科	金魚草	チギタリス	宿根ベゴニヤ	辨慶草	花菱草	ケマンサツ	桔梗	糸桔	君子蘭	千歳蘭
同	石竹科	玄參科	人參科	秋海棠科	景天科	同	罌粟科	同	同	同	同
赤、黄、白、紅、八重、一重	赤、絞、白	白、紅、赤、黄	白、赤、紫	白、赤、淡紅	紫、白	白、赤、黄	淡紅	紫	紫、白	同	同
春秋	秋	同	同	同	同	秋	同	春秋	春秋	同	同
同	同	同	春秋	同	春	春秋	秋	同	春秋	同	春
五月-七月	四月-五月	七月-十月	六月-七月	四月-十一月	七月-九月	五月-六月	四月-五月	七月-八月	六月-九月		
五寸-二尺	五寸-一尺	一尺-二尺	一尺-三尺	五寸-二尺	五寸-一尺	一尺-二尺五寸	一尺-二尺	一尺-二尺	一尺	二尺-三尺	二尺-三尺



其の三 一二年生植物

種	類	名	科	品	種	播種期	栽植期	開花期	草丈
翠	菊	菊	菊科	紅、白、紫、淡	春秋	春秋	五月	八月	一尺二尺五寸
矢	草	菊	同	藍、白、赤、紫、紅	同	同	四月	六月	一尺一三尺
フ	菊	菊	同	白、赤、黃、絞	同	同	五月	七月	一尺一尺二尺
金	花	菊	同	淡黃、濃黃、八重、一重	春秋	同	四月	五月	五寸一尺
天	菊	菊	同	赤、黃、絞	同	同	六月	八月	一尺一尺五寸
ハ	菊	菊	同	黃、赤、絞	同	同	六月	八月	一尺一三尺
貝	工	菊	同	赤、黃、濃紅、淡紫	同	同	六月	八月	一尺一三尺
小	草	石竹	石竹科	赤、白	春	同	五月	六月	五寸一尺五寸
鬚	町	草	同	赤、白、絞	秋	同	五月	六月	五寸一尺五寸
河	撫	子	同	淡紅、絞	同	同	五月	六月	五寸一尺五寸

種	類	名	科	品	種	播種期	栽植期	開花期	草丈
寶	撫	子	同	白、赤	春	春秋	七月	八月	五寸一尺五寸
伊	勢	子	同	白、赤、絞	秋	春秋	六月	七月	五寸一尺五寸
水	仙	翁	同	淡紅、白、淡紫	春秋	同	五月	七月	一尺一尺二尺
ビ	ス	同	同	赤、淡紅	同	同	五月	六月	一尺一尺二尺
ミ	ム	玄參	玄參科	黃、絞	春	春	五月	六月	五寸一尺五寸
ベ	チ	茄	茄科	赤、白、淡紅	春秋	春秋	六月	九月	一尺一尺二尺
千	鳥	草	毛茛科	白、赤、紫	春	春	五月	六月	一尺一尺二尺
フ	ロ	花	花葱科	赤、白、紫、絞、星形、八重	春秋	春秋	五月	九月	五寸一尺五寸
金	蓮	花	桃牛兒科	黃、濃紅、絞	春	春	六月	九月	蔓性ト矮性
カ	ン	桔梗	桔梗科	白、紫	春秋	春秋	六月		一尺一尺二尺
パ	ン	莖菜	莖菜科	赤、白、黑及絞	同	同	四月	五月	三寸一尺
ス	ウ	荳	荳科	白、赤、紫、濃紅(有管)	秋	同	五月	六月	蔓性及矮性

第一章 花卉栽培上の分類



種名	科名	品種	播種期	栽植期	開花期	草丈
段百	菊科	白、紫、淡紅	同	同	八月十日	一尺一尺五寸
草	同	黄、赤、濃紅、淡紅、絞八重、一重	同	同	七月十月	一尺一尺三寸
コ	同	白、赤、淡紅	同	同	九月十月	三尺五寸
草	石竹科	赤	同	同	四月五月	三寸五寸
日	同	赤	同	同	七月九月	一尺一尺五寸
鳳	鳳仙科	白、赤、絞八重	同	同	六月八月	一尺一尺五寸
白	同	白、赤	同	同	七月九月	一尺一尺二寸
松	紫菜莉科	白、黄、赤、絞八重、一重	同	同	七月八月	一尺一尺二寸
葉	同	白、赤	同	同	七月八月	三寸
雞	同	黄、赤、樟	同	同	七月九月	二尺三尺
房	同	黄、赤、紅	同	同	八月九月	一尺一尺二尺

其の四 一年生植物

種名	科名	品種	播種期	栽植期	開花期	草丈
スウ	十字科	白、黄	春秋	赤秋	四月五月	三寸五寸
ネ	幌菊科	白、紫	同	同	五月六月	三寸五寸
ル	同	白、紫	同	同	五月六月	一尺一尺三寸
カ	十字科	白、淡紅	同	同	四月六月	五寸一尺
罌	同	白、赤、紫、絞、リノ八重、二重	春秋	春秋	五月六月	一尺五寸一尺三寸
虞	同	白、赤、絞、一重、八重	同	同	正月六月	一尺一尺二尺
シ	菊科	白、赤、紫、藍、八重、一重	同	同	三月四月	一尺一尺二尺
紫	同	白、赤、八重、一重	同	同	三月四月	五寸一尺
ロ	桔梗科	紅、白、赤、紫、淡	春秋	同	四月五月	三寸一五寸



朝千	アゼラタム	孔雀草	ヘリアントス	葉鶏頭	チャボ鶏頭	鎗鶏頭
顔草	同	同	菊	同	同	同
旋花科			科			科
白、赤、紫、藍、 絞八重、一重	白、淡紅、紫	淡紫	黄	黄	赤、黄、絞	黄、赤、紅
同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同
七月一八月	八月一十月	七月一十月	七月一十月	六月一九月	八月一十月	八月一九月
蔓	一尺一尺五寸	一尺一尺二尺	二尺一尺三寸	三尺一四尺	一尺一三尺	一尺一二尺
性						

以上列記せる各種を更に説明上の便宜のため春夏秋の三期に分ち、以下項を追ふて之が栽培法を説明しよう。

## 第二章 春の花

### ○イリス

「イリス」は鳶尾科に屬する多年生の宿根草で、莖葉の風姿は稍々射干に似て居る花は菖蒲に似て白色である、莖の長さは菖蒲より稍々短い。

「イリス」の一種に「姫イリス」と稱し形状稍々小なるものがある、其花形も亦小なれども早生にして其容姿一段の雅致に富む、所謂姫の名に背かざるものである何れも九月乃至十月の頃株分して充分肥料を施した土地に植へ付ける、肥料は堆肥、人糞尿位で充分であるが時として葉の枯凋する恐があるから、適宜に灰、過磷酸石灰又は米糠等を少しく加用することが必要である、然るときは單に窒素質肥料のみを用ひたものよりは、強剛な莖葉を生じ、従つて豊大なる美花を開かしむることが出来る。



「イリス」は甚だしく移植を嫌ふのではないが、移植した次の年には其勢力が全く恢復せず、花形が幾分矮小となる傾があるから二三年間は植放しにするがよい。

○薔薇

薔薇は古來雅客の稱賛措かざる所であつて、其芳香あり且つ鮮麗なる到底他花の遠く及ばざるところ、眞に花中の王として耻ぢざるものである。

薔薇は落葉性の灌木で其品種は極めて多い、現今其名の知らるゝもの二百種を以て數ふべく、一季咲あり四季咲あり、花形に單瓣あり重瓣あり、又大輪あり小輪あり、花色に白、濃紅、淡紅、淡黃等あり、而して稀に黒色なるもある、其變化に富める亦類が少いと云つてよい。

薔薇は餘り濕り氣多き土地に適せず寧ろ乾燥に耐へる性がある、これが繁殖は或種類によりては稀に實生法によることあれど、多くは挿木及接木法による。

挿木法は春期新梢が四五寸に伸長した頃切り取り、之を挿木床に挿すのである。

又梅雨期節の大氣の濕潤なる時期を利用して普通露地に日除けをして挿木してもよい、大抵二週間乃至三週間にして根を生じ發育状態に移るから、更に之を他に移植し或は瓦鉢に取り揚げ、時々稀薄なる水肥を施すのである。

接木は春彼岸頃芽の稍々動き初めんとする時が宜しく、又秋の彼岸頃にて最もよい、砧木は普通野ばらを用ふる、其法先づ砧木を一寸乃至二寸の根元より切斷し、接木は春彼岸頃芽の稍々動き初めんとする時が宜しく、又秋の彼岸頃にて最もよい、砧木は普通野ばらを用ふる、其法先づ砧木を一寸乃至二寸の根元より切斷し、其切口を平滑にする、而して又根の過剰若しくは長過ぐるをも除去する、接穂は前年の新梢にて勢力優れたるものを選び、二芽乃至三芽の長さに切斷する、而して砧木に接直せしむるところは利刀を以て斜に切り、其反對の側も亦少しく削り、砧木は皮と木質部との間を堅に一寸位削り穂を其間に挿入しよく接合せしめ、打藁を以て結束するのである、接木したものは直に之を畑地に植へ出す、植方は普通根部の外砧木の上端若しくは接穂の隠るゝ位まで土を被ひかくる、斯くして穂の芽が伸び初むれば、砧木の芽も亦盛に萌へ出づる故、注意して直に砧芽を掻き



取りをせねばならぬ。

薔薇を移植するに當り注意すべきは成るべく輕鬆なる土壤を用ふることである。それには腐壤の大部分より成れる土を用ふるがよい、又砧木と接枝との接着をして完全ならしめるため、接目より上方迄土を被ふ場合にも便利である。

施肥は畑植と鉢仕立とで多少其方法を異にせねばならぬ、鉢植には油粕の腐熟稀薄としたるものを二三週間に一回若しくは二回位施與し、花壇植は秋冬の候腐熟堆肥を其根邊に埋め、尙春期生育の状況に鑑みて一二回液肥即ち人糞尿或は油粕の腐熟溶液等を施與するのである。

薔薇は其生育中絶へず砧木より萌芽する性あるが故、常に注意して其萌芽は直ちに切り取ることを怠つてはならぬ、又鉢植は秋期植代へを行ひ適當に剪枝及び剪根を行はねばならぬ。

### ○花菱草

此花菱草は罌粟科に屬する宿根草にして、秋播とすれば翌年四五月の頃、春播とすれば六七月の頃開花す、花は單瓣にして黄色である、其形稍々角張りたる様は直に人をして花菱の名を想像せしめる、此花旭日と共に開き日没に至りて閉ぢる、さる人極めて此花を愛し、狭き庭園に足の踏む處なきまで栽培したるが、其人早朝家を出で夕に歸るの故を以て、遂に此花の満開を見ることが出来なかつたと云ふことである。

花菱草は甚しく移植を忌むが故に、適宜なる場所に播付けにすることが必要である、尤も發芽當時充分なる注意を以てするときは活着するものである、直播は發芽後移植したものは活着後程なく稀薄な人糞尿或は油粕の腐熟した溶液を時々施すがよい。

### ○ハルシヤ菊

「ハルシヤ」菊は一年草又は越年草であつて春秋二期に播種することが出来る、播



種期の如何により晩春或は初秋の候に亘り黄、赤褐、黄赤色等の美花を簇開する、満開の頃花園を遠望すれば恰も毛氈を敷ける如くである其草勢一尺五寸乃至三尺に生長し、一度之を剪除するも再び能く繁茂する性がある、故に切花として賞するにも都合がよい。

栽培法としては發芽後適宜の場所に移植を行ひ、稀薄なる液肥を時々施すのである。

○はいとり撫子

一名蟲取り撫子とも稱す、一年草にして春期播種すれば、五月より六月に亘りて小形なる帶青紫色又は白色の花を開き切花に適する、其葉腋より鳥もち様の一種の粘液物を出し蠅其他の小蟲が之に觸れると直に粘着して自由を失ふに至り、故に蠅取り撫子の名があるのである。

栽培は極容易の方で殆んど手入れを要せぬ、苗床に下種し後之を欲する場所に移してもよいが直播してもよい、東京附近で切花として栽培する農家は主に播付けである、肥料は腐熟堆肥、油粕及び人糞尿等を施用してよい。

○パンジー

和名を三色堇と云ふ、近來到る處之が栽培をみるに至つて居る、矮性の一年若しくは二年草で丈僅に四五寸である、花は五瓣より成り從來堇に比ぶれば頗る艶麗の大輪である、一輪三色より配彩せらるゝもの多く、これ三色堇の稱ある所以である、然しながら又白、黒、黄等の單色のものもある。

繁殖法は實生、挿芽及株分等何れによるも可なれども、就中實播は最も普通の方法である、實播は春期より秋期に至る間隨時播き付くるも能く生育する、然しながら秋期又は早春下種するが最もよい、大抵發芽して二三葉の時鉢又は花壇に移植して肥培するのである、普通秋播は四月頃より春播は六七月頃より開花する又秋播は冬季霜除けを施し、或は鉢植としてフレーム中に取り入れねばならぬ。



○エ キ シ ヤ

多年性の球根草にして、四月上旬頃より花梗を發生し、恰も「フリージャ」に類似して赤褐色の美花を開く、花姿稍々菖蒲に似て矮小なるものである。繁殖は一般に分球法による、植込は十月中旬がよく、花壇又は培養土を盛りたる鉢等に栽植する、斯くて寒氣の襲來と共に鉢植のものは密又は「フレイム」中に取り入れて越年せしむべく、花壇植の分は稍深く覆土し、稍濃厚なる人糞尿等を根邊に注ぐがよい。

盆養の肥料としては充分腐熟した油粕の稀薄水溶液がよく、又久しく貯藏した人糞尿等もよい、花壇其他露地植のものは腐熟堆肥、油粕、過磷酸石灰等を施すがよい。

花謝して莖葉枯死するに至れば、掘り上げ適度に乾燥して貯藏する、而して十月頃に至りて目的の場所に植うるのである。

○庭 菖 蒲

宿根草にして葉形恰も石菖を矮小にしたやうである。草丈僅に五六寸にして各枝端に可憐なる淡紫色の花を開く、庭菖蒲は單に其花の愛らしきのみならず細織にして風姿掬すべく、而かも繁殖迅かにして且つ容易なるが故、花壇の縁植、庭園の境植等となし、又芝の代用としても適當である。

繁殖法は實生、株分何れにてもよい、實生は春秋兩期何れでもよい、只其種實は頗る細小なるもの故、之を下種せんとする床土は従つて成るべく微細土とせなければならぬ、發芽せば充分腐熟した稀薄の液肥を少量宛數回施し其生育を催すがよい。而して秋播は春期三四月に至り、春播は五六月に至り之を欲する場所に植へ代へるのである、株分は八九月頃適當に其根株を細分し、之を他に植うるのでさしたる困難もない。

肥料としては植込前腐熟堆肥の少量を施し、植込後時々稀薄の液肥を施し、又



糞灰、米糠等の少量をも混和して施すが良い。

○牡丹

凡百の花弁中其花容の爽麗にして清艶なる、恐らく牡丹の右に出づるものはあるまい、濃艶を以て特色とする西洋草花も遠く及ばぬところがある、品種は極めて多いが栽培上大體に區別するときは、通常牡丹と寒牡丹との二種となる。通常牡丹と稱する中にも品種非常に多く、殆んど枚擧するに遑がない、今其最も有名なる數種を擧ぐれば左の如くである。

- 飛龍、濃朱色の一重咲にして花徑一尺にも達し、頗る美大である。
- 神樂獅子、咲出し淡紅色にして日を経るに従つて次第に濃紅色に變ずる。
- 雪重、純白色にして一重の大輪である。
- 鎌田錦、紅藤色地の白色絞りにして八重の大輪である。
- 古金錦、濃紅色地に白色の斑紋ある八重の大輪である。

繁殖法には實生、株分及接木法等あり、實生は春期下種し、分植法は春季將に發芽せんとする頃行ふ、而して接木は春季、三月頃、砧木を根本一二寸の處より切斷し、其切口を平滑にする、接穂に用ふべきものは前年の勢力良き新梢がよい、其長さは大抵芽によつて極めるので二三芽が普通である、砧木と穂の用意が成らば、利刀を以て穂の下部を切る、砧木も亦等しく利刀を以て斜に切る而して穂の斜面と砧木の斜面とを接合し、餘り緩くなく又餘り緊くなく打糞等を以て結束する。

寒牡丹、沍寒骨に徹し四邊花なきの候、芳香馥郁として獨り艶麗を恣にするものは實に寒牡丹である、之が繁殖も亦普通種に同じく就中接木法は最も徑捷である、肥料は晩秋又は初冬の候腐熟した液肥及び馬糞等を施與し、適宜防寒の設備を施すのである、品種はあまり多くないが就中現今次の四種は園藝界に名だかいものである。



白寒牡丹、白一重

紅寒牡丹、紅一重

養老錦 紅色に濃紅絞り

明治の譽、淡藤色盛咲

○ペ チ ユ ニ ヤ

又の名を「つくばね」草若しくは「つくばねあさがほ」と稱し八重、一重の二種ある、八重には白、淡紫、桃紅、白紫の絞り等あり、一重咲は喇叭形にして恰も朝顔の如くである、其色紫紅に白の絞り、淡赤色、紫紅等種々あれど就中紫紅色は最も普通である、朝顔と同じく色彩種々に變化する性質がある。

繁殖法は實生、挿木何れにもよることが出来るが、八重は採種困難なるが故挿芽によるを普通とする、實生法は細微土の苗床又は播種鉢に下種し發芽後稀薄の液肥を施與し、本葉二三葉を發生した頃之を花壇又は庭園に栽植するのである、

栽植の際腐熟堆肥、灰等を施し、活着後時々少量の液肥を施與するがよい、春期下種したるものは六七月の候より開花するに至る、又五六月頃挿芽したるものは初秋の候より開花せしめることが出来る、然れども一般に秋咲は初夏の大輪なるに及ばぬ、八重咲は鉢植として最も妙であるのみならず、翌年の種次となすには之を鉢植として「フレーム」中に取り入れるか、又は適宜防寒の設備ある處に移し置くべきである。

▽ ○ ト リ ト ニ ヤ

「トリトニヤ」は多年性の球根草で其球形恰も薔に似てをる、春季四五寸の花莖を抽出し、五六月の頃帯水色の白花を開く、葉は細長くして柔軟である、常に直立することなく直に地面に這ふが故、若しこれと稍密植して繁茂せしむるときは、地はこれ青絨氈を敷きなせる如く、花は恰も白色の浮織せるが如き美觀を呈する加之す芳香頗る高く歐米に於ては之より香水を製造すると云ふことである。



栽植は十月頃に至り鉢又は床地に於てする、栽植せんとする床地には腐熟堆肥、灰、油粕等の少量を施し置き、整地と同時によく土壤に混じ置くがよい、而して漸次酷寒の候に至れば其寒氣に應じ相當な防寒設備を施すべきである、又稍々濃厚な人糞尿等を其根邊に注ぎ置く事も亦防寒の一助となる、鉢植のものは之を「フレーム」中に取り入れ發芽後は稀薄の液肥を施給し、適當の濕氣を保持せしむる時は露地のものに比し一層早く開花する、謝花後は暫時にして其露地のものと鉢植のものを問はず、稍々乾燥に保つ様すべく、殊に鉢植のものは六月頃より漸次灌水を減少し遂に全く乾燥する様にして其莖葉の枯死と共に之が球根を掘り起すのである、掘り出したものは之を乾燥な土壤中に貯藏するか、又は稍々冷涼にして過温ならざる場所に貯藏するのである。

▽〇チューリップ

多年性の球根草で内外園藝家の齊しく愛觀する花卉である、之を大別すれば一

重、八重、牡丹咲の三種となる、更に細別すれば其幾十種なるを知らざる程ある又花色の豊多なること一々枚舉に遑なきまでである、花形は稍々本邦の牡丹に類似し又虞美人草にも似て一層麗雅なるものである、葉は綠青に白粉を裝ひ且つ光澤がある。

栽植、之が種球の栽植は九月下旬より十一月に至る間で、鉢又は花壇に植へ込み酷寒の候に霜除けを施して置く、然るときは翌春早々花莖を抽出し、四月頃に至れば五六寸に伸長し開花する、但し普通「チューリップ」は一球が一輪を咲くのみである、「チューリップ」は鉢植花壇植何れにも適すれども、趣向を凝らしたる花壇等に於ては一段の趣味を認めることが出来る、而して露地栽植のものは常に鉢植のものより大輪のものを開く。

肥料は植込前堆肥、油粕、灰の類を圃地に働き込み置き、發芽後更に稀薄の液肥を施與するがよい、鉢植のものも亦發芽後時々稀薄の液肥を施與すべきである



謝花後は乾燥に保つこと略「トリトニヤ」の如くにし、六月下旬頃球根を掘り出して其莖葉を去り、適度に乾燥して貯藏せねばならぬ。

〇〇千鳥草

千鳥草は英名を「ラークスパー」と云ひ一年又は越年草である、花色白、紫、淡紅の三種ある、九十月の候播種すれば翌春、春播すれば八九月の頃開花する、其状は千鳥の群飛せるが如き奇花を開く、これ千鳥草と命名したる所以であらう、草勢三四尺に達し且つ花期非常に長き故挿花に適す、これは鉢植にするよりは花壇とするか又は切花用として畑地に栽培する方が都合がよい。  
肥料は下種せんとする畑地又は花壇に、堆肥、米糠、灰の類を混合して鋤き込み置き、發芽後は更に少量の人糞尿等を施與し生育を促進すべきである。

〇リユーコンシス

「リユーコンシス」は細長き光澤ある葉を有する球根草にして、五六月の候花梗を

抽出し、淡紫色の小花を簇開する、花は花梗の下部より順次上部に咲き及び花期長くして美麗である。

栽植、之を栽植するには秋期十月頃にして、鉢植、露地植等に可なり、鉢植は之を「フレーム」等に取り入れ露地栽植のものは簡單なる防寒設備をせねばならぬ、謝花後の手配は「チューリップ」に準じてよい。

〇ルーピナス

一年草にして春期播種す、草丈二尺乃至三尺に達する、葉は稍楓の如く七個に分裂し一層大なり、花は藤花の如く房状をなし、色は淡紅、淡紫、或は二者を合せたるものもある、然れども藤花と反對に直立して上方に咲くが故之を昇り藤など謂ふ、牧草に此種のものあり通稱「ルーピン」と云ひ、形状は殆んど同一であるが花容は遙に「ルーピナス」に及ばぬ、性強健にして能く寒氣に堪へ花壇用としても鉢植としても共に頗る好適する。



下種は苗床に於てし、發芽せば稀薄の液肥を施し其生育を促進し、本葉三四葉の頃之を鉢又は花壇に移し、時々追肥を施與するがよい、鉢植には稀薄な油粕の水溶液を與へ、花壇植には腐熟堆肥、油粕、灰、人糞尿の類を施してよい。

○をだまき草

をだまき草は強健なる多年生の宿根草で、在來種及西洋種の二種ある、在來種は春秋何れの期節に下種するも能く發芽生育し、一度苗を得るときは容易に枯ることはない、草丈は一尺内外で花は白及淡紫色の二種ある、此花は艶麗を以て誇るに足らざれども、何となく捨て難い情致がある、西洋種は在來種より一層長大にして、高きは三尺内外にも及ぶものがある、花は大輪にして一つの奇形を具へ、色は白、黄、淡紫及淡紅等ある。

下種は肥沃なる苗床に於てし、發芽後二三週間を経て之を目的の場所に栽植してよい、栽植後活着せば時々液肥を施して其生育を助くべく、肥料は腐熟堆肥、

油粕、人糞尿の類で宜しい。

○含羞草(おぢぎ草)

一年草にして、風姿ネムの木に酷似し、葉は朝に開き夕に萎む、其觸感過敏にして物に觸るゝ時は忽然兩面より伏合し、且つ其葉柄は垂下して嬌羞の狀を呈するが如くである、これ含羞草の名ある所以である、花は淡紅色にして化粧刷毛の如く細辨毛が群生してをる。

含羞草は往々野生に見るとあるが、之を栽培するには春彼岸頃種子を播く、發育遅くなるが故二三寸に生長したる頃、小形の鉢に移植し盆養とするに宜しい、活着後は時々稀薄の油粕溶液を施し、其生育を促進する。

○勿忘草

矮小なる宿根草にして、花期長く春より初夏の候に至る間絶へず開花する、其草丈長きも五六寸を越へず、花は小輪で群がり開き極めて愛らしい、淡紅、淡青



藍色等あれども淡紅色のものは中々得難い、勿忘草は近來の渡來に係はり、風姿頗る温雅にして其由來に一種の情話を有するが故、よく粹人間の贈答に用ひられる、今西書に記す傳説によるに、曾て鴛鴦も昔ならぬ想思の人あり、一日郊外散策の道すがら眺むるともなく、突き出せる懸崖に數株のいとも可憐なる草花の咲き亂れたるに心付き、少女は其花を採らんことを青年に乞ひたれば、青年は直に懸崖に辿り之を手にしたる一刹那、岩に迂りて脆くも崖下の激流に陥りて溺れんとするとき、其攫みたる一株の花を投げやり「吾を勿忘」と絶叫して敢なき最後を遂げたと云ふことで、之れより此花を勿忘草と呼ぶやうになつたと云ふことである。

繁殖法は實生又は株分法により、實生は春秋二期に播下する、秋播は翌年に至り春播は夏期に至りて花を開く、此花卉は寒暑に強からざれば冬期は防寒の用意をなし、盛夏の候には葎蓋の如きものを以て強き光線を遮り、稍々冷涼に保たねばならぬ、肥料としては油粕溶液の極稀薄なものを時々與ふればよい。

○カーネーション

多年生の宿根草にして本邦在來の石竹に類似して居る、花は一重八重の二種あり、色は白、赤、紅、深紅、黄及絞り等種々ある、何れも芳香を有するが故一名麝香撫子とも云ふ、容姿高尚優雅なるが故歐米に於ては到るところ之が栽培をみぬところはない、觀賞花卉中最も優雅なるもの、一に數へらる、性質強健なれど嚴寒の候には多少凍害を免れぬが故、露地栽培に在りては冬季藁稈の類を以て防寒の設備をするか、又は鉢植として温室或は木框内に取り入れて保護を加へねばならぬ。

繁殖法は、實播及挿芽にして播種は春秋の二期に行ふことが出来る、秋播は翌年五月頃春播は其年の九月頃開花する、挿芽は極めて平易で且つ生育が頗る速いので現今一般に應用せられて居る、花壇植のものには人糞尿、米糠、油粕等を用



ゆべく、鉢植のものには油粕の水溶液の稀薄なものを時々施すがよい。

○カルセオラリヤ

性極めて軟弱なる越年草にして、本邦に於ては未だ此花を栽培するもの甚だ少い、花は頗る奇形にして花梗の着部に口を有する、稍々楕圓形の袋状にして兩面豊かに膨らみ、恰も巾着に錢を満したようである、之に附するに巾着草の名を以てするものがある、蓋し適當なる命名と謂つべきである、色は純白、純黄、黄地に紅絞り、黄金色、淡褐色に紅色、樺色、藤色及種々の絞り、星形等の種々ある其色彩頗る艶麗である故に鉢植として愛翫するに適當する、長く室内に置くも適宜に水分を供給するならば一花優に二十日間を保つことが出来、一花莖能く三四十日を保つことの出来る頗る長命の花である。

「カルセオラリヤ」は我邦に於ては露地栽培には不適當である、其葉面に水滴の附着するも其部分忽ち腐敗し、少しく強風に吹かるゝも亦直に葉面に斑點を生ずる、又甚しく乾燥を忌むものである、故に雨露に直接せざる温室或は木框内に於て培養し、灌水は極めて注意し細口の如露にて葉にかゝらぬ様鉢内に注がねばならぬ。

播種期、歐米諸國に於ては五六月が普通であること云ふことであるが、本邦では七月より九月頃までを適當とする、早播は却つて培養困難である、寧ろ十月に下種するも晩くはないのである。

「カルセオラリヤ」の種子は頗る細微なるが故、之を播種するには輕鬆なる砂交りの腐植土を篩ひ分け、細粒子のみとなし、之を播種鉢に盛り其内に播種せねばならぬ、下種後は時々灌水せねばならぬが常に極めて細口なる噴霧器を用ひ、決して如露等にて猥りに多量を注いではならぬ、又鉢の外底部を暫時水中に浸漬して置く時は、鉢底の小孔より水分浸入し毛細管引力により漸次上面を濡ほすやうになる、斯くするときには如何に細微な種子と雖も決して流亡等の虞はない、此方



法は獨り「カルセオラリヤ」のみならず、多くの細粒種子下種の場合又は鉢植等に應用せらるゝところである。

斯くて十二三日乃至十四五日を経れば發芽するが故、暫時温室或は木框内に於て此儘生育せしめ、生育するに従ひ適宜間引を行ひ、本葉が僅に出ようとするとき一回移植を行ひ、更に三四葉に至りて之を五六寸の鉢に數本宛移植する、移植のとき注意すべきは葉折れ易きを以て最も丁寧にならぬことである、尙漸次密生するに至れば四寸鉢に一本植となし、夫より漸次根の全體に廻るに従ひ六寸若しくは七寸鉢に植える、培養期中殊に育苗中は比較的低温度即ち華氏四十度位に降るも差支へはない。之に反して高温に失するときは病蟲害に侵され易く、且つ徒に草丈の伸長し過ぐる嫌がある、此の如にして翌春花梗を抽出し漸次開花し、早きは四月より晚きは六月に至る、其間常に花の絶えることはないのである、肥料は油粕を充分腐熟せしめて置いて、之を二十倍乃至三十倍の稀薄にし一週

間に一回位施せば宜しい。

### 〇月見草

月見草は性極めて強健栽培容易なる草花にして諸所に野生して居る、栽培せるものは春秋二期に播種することが出來、種類は黄色の大輪小輪及夕化粧と稱する白色のものがある、一般に野生種よりは、大輪である、草丈三尺有餘に達し、莖は少しく赤味を帯びて太く拇指大となる、早きは五六月の頃より開花を始め晚きは九月頃に至る、大輪及夕化粧は野生に比し其丈遙に矮小である、殊に夕化粧は一尺にも足らぬ、何れも着花頗る多く下部より漸次上方に咲き及ぼす、風姿淡白なるところ却つて愛すべきである、此花の特兆とするところは、他花と其趣を異にし必ず夕景より開花することである、故に夜會等の場合には缺くべからざるもので、月見草又は夜會草の名ある所以である、野生のものは結實にして自然に繁殖する栽培も亦何時播下するも能く發芽し生育すれども、秋播として沍寒の候僅



に防寒の用意をすれば五六月の候より、春播は翌春に至りて開花する。

下種は苗床に於ても又は直播してもよい、肥料には腐熟堆肥、人糞尿、灰等を施與してよい。

〇〇ひげなでしこ

多年性の草花にして草丈二尺内外に達し、頂點に小さき紅、淡紅、絞り等の花を簇開する、花瓣は分裂して恰も髯状をなす、これ此名の據て來る處である。

播種は春秋何れにても差支へないが一般に秋播が成績良好である、殊に晩春の候より開花せしめんと欲せば七月下旬乃至八月の候に於て播種し、寒氣の襲來するまでには苗をして充分強壯なる生育を遂げしむる必要がある、斯くて翌春早々目的の場所に移植するのである、開花後莖葉を刈り取り培養すれば翌年再び開花するが、更に播種して新種を培養する方がよい、花期比較的長きが故切花として適當である、東京附近では切花用に盛に栽培して居る。

肥料は腐熟堆肥、硫酸「アンモニヤ」、油粕等を施與してよく府下の花戸は主に人糞尿單用である。

〇〇ランキンユラス

「ランキンユラス」は球根草にして多少本邦の翠菊に類似した處がある、種類は多けれども本邦に於ては未だ廣く栽培せらるゝに至らぬ、花に淡紅、淡紫色等ありて四月頃開花する。

繁殖法は實生及株分けにして、何れも秋期に行ふ、冬期は何れも簡單なる防寒の設備をする必要がある、開花後は「チューリップ」等と同じく漸く乾燥せしめ、莖葉枯死するに至れば球根を掘り上げ、紙袋又は乾燥せる砂中に入れ秋季植込するまで貯藏するのである。

肥料は油粕の腐熟水溶液を稀釋して、一ヶ月三回位施與すればよい。

〇〇百日草



百日草は菊科に屬する一年性植物にして品種は極めて多い、本邦に於て栽培せらるゝものゝみにても十數種ある花に八重及一重の別あり、色は紅、黄、淡紅、赤及絞り等主なるものである。

播種期は處により異なるべきも東京地方に於ては三月下旬乃至四月上旬頃が適當である、下種するには精耕した床地に於てし、發芽後苗の一二寸に生育したる時肥沃の苗床に假植し、更に二三寸に及びて花壇又は鉢に移植するのである、性極めて強硬にして諸種の土質に適し栽培甚だ容易である、五六月の候より晚秋降霜の候に至る間絶へず新芽を生じて開花する、故に切花とするに適當である。

肥料は花壇又は切花用のものは、腐熟堆肥、油粕、人糞尿、硫酸「アンモニヤ」等宜しく、鉢植のものには油粕或は人糞尿の腐熟水溶液の稀薄なものを施せばよい。

○マルケリツト

多年性の半灌木にして、屋外に於ても三四月より晩夏の候に至る間絶へず開花

する、其形状殆んど全く除蟲菊に類似し、且つ其葉態も亦之に似たるを以て一見直に識別し難き程である、之を温室にて培養すれば二三月頃開花する、花色は白なるが故、素より艶麗を以て誇るに足らぬ、然れども高尚にして優雅である、降霜期に至れば掘り上げて温室又は「フレーム」又は窖内等に移し、春期取して肥培し或は露地に栽植するのである。

繁殖は挿木又は播種によるべく肥料は堆肥、人糞尿、油粕等を適宜混合施與してよく、鉢植には稀薄人糞尿又は油粕の水溶液を施してよい。

○フリージャ

「フリージャ」は多年性の球根草にして、葉形菖蒲の矮小なるが如くである、秋期より春期に至るまで植込みをすることが出来るが、普通は秋である、開花は四月上旬で其色白或は帶黄白色の喇叭状をして居る、芳香頗る高きが故に歐米では之より香水を製造すると云ふ、現今我國に於て到る處の温室、温床又は花壇等



に栽植せらるゝをみる。

栽植法は、謝花後莖葉枯れたる頃球根を掘り上げ、少しく乾燥して貯藏して置いたものを、十月上旬頃床に栽植する、實生をするには五月頃採種したものを直に播下すれば、程なく發芽するから其後時々施肥し防寒の用意を充分にするときは次年には已に花をつける。

鉢植並に育苗中の肥料は腐熟した稀薄人糞尿故は油粕溶液の二三十倍液を使用するがよい、花壇植等には少量の堆肥、油粕、硫酸「アンモニヤ」等をも混用するがよい。

レ ○フロックス

本邦にては之を桔梗撫子など云ふものもある、一年草又は越年草であつて花は一重若しくは八重である、其色彩種々あり花姿温雅にして之を花壇に密植して開花せしむるときは、恰も毛氈を敷き詰めたるが如き壯觀を呈する、此種類の中

に花瓣細裂して星形を呈するものがある、「スターフロックス」と稱し最も珍重せられる。

播種、播種は春秋彼岸の二期にして、發芽生育共に容易である、播種するには精耕した苗床に於てし、發芽生育して二三寸に至れば之を目的の場所に植へ出すか、或は一二寸のとき一回假植し苗をして強健ならしめて後初めて植出してもよい、鉢植とするには成るべく餘り長大せざるとき三寸許の鉢に植うるがよい。

肥料、切花用として畑地に栽培するもの、又は花壇植のものは栽植前豫め腐熟堆肥の類を鋤き込み置き、栽植後二回人糞尿、油粕、米糠、灰等を追肥すれば花色一層の光澤を添ふ。

○福壽草

近寒肌を裂き霜雪身を襲ふ嚴寒の候、超然として笑を呈し、梅と共に屠蘇の宴に列して芳香を放ち、家運の長久福壽を年頭に祝するの榮を荷ふは、蓋し此花名



の福壽なるを以て吉兆とするに依るのである。

福壽草は多年性の宿根草にして品種は極めて多い、花色は何れも黄色である、由來福壽草は寒氣に堪ゆるの性あれども、之を自然に放置するときには陽春の和氣に逢ふに非ざれば開花を催ふさぬ、故に新春の裝飾に供せんとするには、秋期掘り上げて之を砂交りの土壌を盛れる鉢に栽植し、温室又は「フレイム」中に取り入るのである、然れども温室や「フレイム」の設備なき者は成るべく日當りよき場所に移し、手當を盡さねばならぬ、謝花後は之を畑地に移植し充分肥料を施すのである、而して眞實の候になれば往々旱害を蒙ることある故に、適宜日被をなし強烈なる光線の直射を避けねばならぬ。

肥料、盆養の肥料としては長く貯藏したる油粕の溶液の稀薄なるものを施すべく、露地に移したるものには人糞尿の腐熟せるもの、灰又は少量の米糠、油粕等を加用するがよい、要するに夏期乾燥に失する虞ある故、成るべく濃厚肥料又は

堆肥の如きものは多く用ひぬが利益である。

○翠菊(えぞぎく)

栽培區域頗る廣く本邦到處殆んど此花の栽培を見ぬはない、従つて花の名稱も地方によりて異り、信州地方にては之を朝鮮菊と呼び、東北地方にては東菊と云ふ、而して東京及東京以西にては大抵翠菊と稱して居る、一年若しくは二年草で花に單重八重の二種ある、赤、淡紅、紫、白色等の數種ある、又其樹形頗る矮性で丈僅に一尺に満たぬものがある、何れも菊の如き清秀の氣品には乏しいが壯麗にして艶美である、切花として水揚げよく長く觀賞することが出来る。播種期は春秋の二期にして床播とする、秋播は翌春、春播は七月中旬頃より開花する。

肥料は腐熟堆肥、人糞尿、過磷酸石灰、灰等を施して、よく鉢植のものには油粕及人糞尿の腐熟したるものを用ひてよい。



○金雀兒(えにしだ)

草花として述ぶるは少しく不妥當の嫌あれども、一般に切花として需用頗る廣ければ敢て茲に述ぶることゝする「えにしだ」は落葉性の灌木にして枝細繊強く深緑を帯びて居る、葉はわうばいに似て互生する、春の末に綠梢長く垂れ、各梢に黄色の小さき蝶形の愛らしき花を開く、状態頗優美にして雅致に富む。

繁殖法は實生、挿木、壓條等何れの方法によるも容易である、實生は春季播下し二年若しくは三年目に至りて開花する、挿木は春季發芽前が最も好期である。肥料、實生挿木等は發芽若しくは活着後、時々液肥を施して其生育を促進し、壓條は最初成るべく充分腐熟した堆肥を施與し、其發根を助くるがよい、其他油粕、灰、人糞尿等も効多き肥料である。

○鐵線蓮

鐵線蓮は多年性の蔓性草にして、莖葉稍々山芋の如くである、四五月の候、白

青藍、紅、黄及深紅色等の豊大なる美花を開く、花姿艶美と云ふよりも寧ろ清秀にして雅致に富んで居る。

繁殖法は主に實生にして、春彼岸頃床に播き付け、發芽後時々人糞尿、米糠、硫酸「アンモニヤ」等を稀薄にして施與し、其生育を助くるときは二年乃至三年目にして開花するに至る。

○朝露草

一年草にして春季播種するものである、發芽後其生育旺盛ならず、草丈低くして一尺内外に達す、葉は五個に分裂し、葉脈より各一個の花梗を抽出して白色の花を開く、此花は黎明に開花し東天旭日を見るに至れば直に萎れる、依つて朝露草の名があるのである。

下種するには精耕した苗床に於てし、發芽して本葉二三葉を出したる頃之を他に移植する、移植すべき土地は豫め腐熟堆肥等を施し、成るべく肥沃ならしめて



置く必要がある、移植後活着せば時々稀薄の人糞尿、硫酸「アンモニヤ」、油粕等を施與し其生育を助くべきである。

レ○アルメリヤ

強壯なる宿根草にして、簇生を嫌はず、草丈短くして二三寸を越へず、葉は針状を呈して頗る小さく稍々芝草に似て居る、四五月頃葉間より三四寸の花梗を出し、淡紅色の小球の如き愛らしき花を開く、芝草の代用として花壇の縁植等に適する。

繁殖法は實生及株分により、實生は春秋何れの季節にもよく發芽し、よく生育する、根分けは春期發芽して一寸位の時行ふ、鉢植とするも又之を露地に簇栽するも共に捨て難い趣がある。

肥料、露地栽植のものは土地に豫め腐熟堆肥を鋤き込み、後栽植して活着後時々稀薄の液肥を施すがよい、鉢植には油粕の水溶液を施してよい。

レ○アラライサム

一年若しくは越年草にして、春秋二期に播種し、春播は六月に秋播は三月下旬頃より開花する、草丈僅に五六寸にして、白色の小花を簇開し、下方より開花を初め漸次莖頭に及ぶものである、花容甚だ美ならずと雖、芳香高く「フリーシヤ」、「ヘリオトロップ」と其芳香を競ふ、一旦咲き了る頃剪り込めば更に整齊したる新芽を生じ、一齊に開花する斯くして尙何回となく切込み且つ開花せしむることが出来る、冬期は温室若しくは「フレーム」内に於て越年せしめねばならぬ肥料、花壇庭園等に栽植したのものには人糞尿、油粕、等を施し、鉢植のものにはこれ等の腐熟した水溶液を薄めて時々施與すればよい、而して剪り込みをした當時は稍々肥料分を多くする必要がある。

レ○紫羅欄花

一年若しくは二年草にして、春秋二期に播種し春播は四月上旬秋播は九月中



旬、何れも床若しくは鉢に播下する、春播は七月上旬、秋播は四月上旬より紅、淡紅、白色等の小さき美花を簇開する、品種は大別して一重、八重、香「アラセイトー」等の三種とするが、尙之を細別すれば種々なる品種がある、何れも花壇植、庭園用等によく、又鉢植として段上を飾るにも適する、「ストック、テンウキーク」種の如きは頗る早生で且つ其莖葉餘り長大に至らぬが故鉢植に最もよい、又香「アラセイトウ」は芳香を放つ故室内裝飾用として最もよい。

肥料、花壇、庭園等には栽植の前豫め善く腐熟した堆肥を少く鋤き込みて整地し、栽植して活着せば人糞尿、米糠、硫酸「アンモニヤ」若くは油粕等を腐敗せしめて置いて、稍々薄くしたものを時々施給するがよい。

〇〇 藻 蓀

藻蓀は多年性の宿根草にして、容姿恰も菖蒲に似葉は少しく細く光澤を帯び、花も亦菖蒲に酷似し敢て遜色なきも稍々小形である、五六月の候に開花する、人

の善く知るところで到るところの花壇の一隅或は池沼の邊りなどに栽培して居る繁殖法は實生及び株分にして、實生は四月中旬頃播種し、株分は春秋二季に行ふ、栽培は容易である、盆養とするよりは花壇又は庭園植とした方がよい。

肥料として特に愛好したるものなきも、寒中は濃厚なる肥料を施し、春夏の候は稀釋したる腐熟人糞尿等を施給するが宜しい。

✓〇アネモネ

「アネモネ」は毛茛科に屬する半耐寒性の球根草にして、十月頃花壇、鉢又は切花用畑地等に栽植する、早春他花に先つて開花する花卉である、花色は紅、白、紫、黄、淡紅及絞り等で八重一重の二種ある、容姿濃麗艷美にして「ハヤシンス」「チューリップ」等と共に、現今園藝家に最も愛翫せらるゝ西洋花卉である。

栽植期は十月上旬より十一月下旬に至るまで宜しく、發芽後は簡單な防寒設備をして置くがよい、嚴寒中濃厚なる人糞尿を施し、二月頃に至り更に稍々稀薄



にしたものを施すを良とする、而して盆養のものは米糠、油粕等の稀薄溶液を時々施給すべきである。

○櫻草

櫻草は多年性の宿根草にして、其種類極めて多く數十種に及ぶ、花は八重、一重の二種あり、色は紅、淡紅、黄及白色等で容姿清洒鮮麗である、花期長く草勢短きが故盆養に最も適する。

繁殖法としては實生、根分の二種あり、根分は早春發芽に先ちて行ふを良しとすれども、秋期に行ふても差支へはない、實生は春秋何れの季にても宜しく、秋播は翌年四月下旬より開花するが、春播は充分丹精せざれば其年内に開花するところが困難である。

性強壯なれば防寒の必要なく、秋播と雖殆んど霜除せずで差支へないが、安全を欲せば藁稈類にて簡單なる覆をするに如くはない、「プリムラ、サイネンシス」

は櫻草の一種にして、冬季「フレイム」を用ひて防寒するか又は温室中に栽培するものである、又西洋櫻草「プリムラオブコニア」は櫻草の一種にして、其容姿普通櫻草に類似せるも丈稍々高く花容稍々優し、春期より秋に至る間絶へず開花する、故に四季咲櫻草の名がある、花は淡紅及白色にして雅致に富む、繁殖は實生又は株分により、其時期及播種期等は前種と同様である。

肥料、花壇或は花畑に於ける肥料は人糞尿、堆肥、油粕等を施すがよく盆養にはこれ等の腐熟した稀薄溶液を時々施給するがよい。

○金魚草

多年性の宿根草にして、花は金魚の口唇に似たる一種の奇形を呈し、色は深紅、淡紅、淡褐黄色等種々ある、花壇植及鉢植に適し水揚よろしきが故切花によい。

播種は春秋の二季に行ふことが出来る、春播は年内に開花するが秋播には及ばぬ、秋播するには十月初旬輕鬆砂土を撰びて下種し、嚴寒中は藁被ひをして防



寒すれば、翌春は旺盛なる生育をなし早きは五月中より開花し、八月下旬に至る間新芽を出して漸次開花する。

栽培法は容易の方で、一度下種すれば二三年間枯死することはない、然しながら二年以後は根株漸次衰弱する故、絶へず新株を養成するがよい。

肥料、花壇植、切花用等の場合には、元肥として植込の際堆肥の少量を施し、後二三次人糞尿、油粕、米糠、硫酸「アンモニヤ」の類を施せばよく、鉢植は腐熟油粕の水溶液を稀釋して時々施すがよい。

レ○金鶏草

金鶏草は強壯なる宿根草にして、葉は細長くて互生し、花は純黄色にして鮮麗である、形状旭日章に酷似するを以て俗に勳章花とも稱する、花梗細長きを以て風雨等の爲に往々倒覆することがある。

栽培甚だ容易で春樹床地に下種し、發芽後本葉二三葉を生じた頃之を他に移植

する、性能く移植に堪へる、肥料は金魚草に準ずる。

○金箋花

一年若しくは越年草で極めて強壯である、晩春乃至初夏の候より開花し、花は濃黄、淡黄色にして單瓣、重瓣の二種ある。

栽培は極容易の方で春と秋とに下種することが出来る。春播は秋播に比して莖葉は頗る繁茂するが大輪の花を見ることが困難である、故に普通秋播として翌早春に目的の場所に移植する、苗床に在る間一回假植をして置く時は根張りがよくなり本植して萎衰せぬ、嚴寒の候は簡單な防寒設備をすることが必要である。

肥料、栽植の際腐熟堆肥の少量を施し、活着後人糞尿、油粕等を二三回施給するがよい、鉢植の肥料としては腐熟油粕の稀薄溶液がよい。

√○シネリア

「シネリア」は近來の渡來に係るものにして、最初は園藝術の未だ進歩せざり



しが故、成花も充分でなかつたが、漸次斯道の發達と熱心家の研究とにより、今日の如く觀賞に價するものを栽培し得るに至つたのである。

原産地に於ては播種の年に容易に開花すると云ふ事であるが、本邦に於ては風土異なるにより年内に開花せしむることは困難である。

温室、温床若しくは「フレーム」等を利用して甫めて二年を以て開花せしめ得るのである。

播種するには、先づ八九月若しくは七月の頃篩別けたる輕鬆砂土を播種鉢に盛り、之に極疎に播き付け温室若しくは木框内に入れ、細口噴霧器を用ひて時々丁寧に灌水し、常に適度の濕氣を保たしめると凡そ二週間位で發芽するに至る、若し温室、木框等の設備なきときは、硝子板を以て播種鉢の上面を被ふて間に合はせることも出来る、斯くて晩秋冷氣を感じる候に至れば、必ず温所に移して保護せねばならぬ。

發芽後程なく他の鉢に移植し、更に二三寸に生長したるとき一本宛他の鉢に栽植する、而して二週間に一回位肥料として腐熟人糞尿又は油粕の稀薄水溶液を施すのである、又冬期間温室内に在るものは適當なる溫度を保たしむることを得る故、多少生育が早いけれども、冷床木框内に在るものは只凍結を防ぐに過ぎぬ、陽春近くに及び温室内のもは非常に繁茂し、二月中旬頃より開花するに至る、冷床木框内のもは此頃より漸く生育盛となり、三月中下旬より開花する。

花は本邦の菊に類似し、徑一寸乃至二寸位で莖枝の先端に悉く開花する、頗る色彩に富み白、紫、赤、淡紫、淡紅等一々列擧するに困難である、開花期は播種期の遅速により異なるも、花期極めて長く二ヶ月以上に及ぶものがある、花壇、鉢植共に鮮麗比類なきも、鉢植にして之を段上に飾り、又は机上卓上等室内裝飾として一層の美觀を添ふ。

○ ジエラニユトム



「ジエラニウム」は渡來の比較的古い西洋草花にして、温室内に於て嚴冬の時  
といへどもよく花を着けることが出来る、又木框若しくは室内に置くも亦善く培  
養すれば嚴寒の頃開花せしむることは困難であるが、早春より晩秋に亘り絶へず  
花をみる事が出来る。

葉は本邦の葵に似て稍々小なるものは單瓣、複瓣の二種にして、單瓣中には  
又大小の別がある、色は紅、赤、淡紅、白、朱赤色等にして何れも艶麗である。

繁殖としては實生、挿芽の二法あれども挿芽は殊に容易で且つ其生育迅速であ  
る、故に何れの栽培家も皆此法によつて居る、寒氣に弱きを以て充分の設備をな  
せる室内若しくは温室、温床等ならでは越冬せしむることが困難である。

肥料は充分腐熟した油粕の稀薄溶液がよく、大抵十日乃至二週間に一回施與す  
ればよい。

✓ ○ シクラメン

熱帯産の球根草にして、性極めて軟弱である、故に一般に温室植物として栽培  
せらる、然しながら晩春の候よりは室外に出し培養することが出来る。

繁殖法としては實生、球分けの二法ある、實生は春秋の二季に、軟かき土壤に  
下種する、球分けは謝花後掘り上げ貯蔵する際行ひ、之を栽植するには、十月  
頃鉢に移し、上面少しく現はるゝ程度に土を被ふ、植込後多濕に過ぐれば腐敗し  
易き故、常に稍々乾燥を保たねばならぬ。

「シクラメン」の草丈は球根の大小によりて異れども、一般に五六寸位である  
先づ球より數條の葉を發生し、其間より花莖を抽出して、先端に白色、帶紫紅色  
の極めて優美なる花を開く、實生は二年目に至らざれば花をみること難く、多く  
は下種の翌年四月上旬頃開花する、温室植物として大に賞翫せらるゝ一種であ  
る。

✓ ○ 菖蒲



多年生の宿根草にして、四五月頃開花する、形状杜若に酷似し、一見兩者の識別に苦むことが多い、其主なる相違の點は、菖蒲は葉幅一般に狭く、花莖の丈長きことである、性濕地を好むが故、池泉の邊若しくは絶へず水濕ある地に栽培すべきである、但し著るしく乾燥に失せぬ限り、畑地に於ても亦栽培することが出来る。

繁殖法としては實生及株分けの二法あるが、就中株分けは最も普通に行はるゝ方法である。

實生は春季少しく濕氣を含む地に播種すればよく發芽する、發芽後時々稀薄の液肥を施し、雜草の繁茂を防ぎ且つ餘り密生せるところを間引くがよい、大抵下種の翌々年より開花する。

移植及株分けは謝花後八月頃より、十月の候までの間に於て行ふが最もよい然しながら翌春二三月の候に於て行ふも開花はする、春植したものは秋植のもの

に比し、花形は餘程矮小なる不利がある。

肥料は寒肥として充分腐熟した堆肥の少量と、稍々濃厚な人糞尿の類を施し、七八月頃稀薄な追肥を少しく與へるもよい。

○ヒヤシンス

近年渡來せし西洋草花にして、歐米人の最も賞觀する球根草である、種類は八重咲、一重咲の二種ある、花色極めて多く白、淡黄、紫、淡紫、紅及淡紅等ある、就中八重咲、絞り咲等は最も珍重せられる、此花草は鉢植として最も適すれども、亦毛氈花壇に栽植して、適宜趣向を凝らすときは、一層其美觀を發揮することが出来る。

栽培法としては、他の球根類と大差あることなく、謝花後漸々乾燥に保ち、莖葉の枯死するに至りて掘り上げ、適座に陰乾して屋内に貯藏し、十月上旬頃鉢又は苗床に植込みするのである鉢植として温室又は温床に入るゝものは最も安全



に開花せしめ得べきも、此等の設備なきときは稿稈類を用ひて霜除けを施さねばならぬ、若し早春の候より開花せしめんと欲するならば、必ず温室又は温床を用ひねばならぬ。

肥料としては發芽後稀薄の腐熟油粕又は下肥の類を二三回施すがよい。

○ネモフ井ラ

「ネモフ井ラ」は二年生の矮性草花にして、本邦在來の糸桔梗に似たる美花を開く毛氈花壇の栽培に適する。

種子は秋九十月の頃、床又は鉢播として一寸許り生育したる頃、他の苗床に假植し霜除けを設けて、越年せしめ、翌春花壇に植る出るのである。若し苗の移植後れ久しく床に放置するときは、軟弱なる生長をなし、花壇植とするも甚だ見榮へせざるが故、成るべく早く植へ出すことが肝要である。

○雛菊

強壯なる宿根草にして、草丈け頗る低く、全長僅に二三寸を越へぬ、早春他花に先つて開花するのみならず、花期頗る長く、寒中少しく防霜の設備をなすときは殆んど周年開花せしむることが出来る、一莖一花を着生し、一株多數の花莖を抽く、其花態は無數の細瓣相重疊して開花する、其狀頗る佳麗である、盆養として宜しく又花壇其他縁植として頗る好適する。

繁殖法は實生とするも可なれど、根株漸次増殖するを以て、株分けとするも亦甚だ容易である。

實生は種子を適宜採取貯藏し置き、春期或は秋期細微土の苗床に下種する、株分けは随時分割して栽植して差支へない、而して秋末に至れば繁殖用と觀賞用に係らず、簡單な防寒設備をなし霜雪の爲に損傷せられぬ様注意せねばならぬ、此際少しく丁寧なる防寒を施せば、冬期中もよく開花せしむることが出来る。

肥料としては腐熟堆肥に米糠、硫酸「アンモニヤ」の類を混じ、少量宛時々施與



すれば足る。

○水仙

水仙は古來本邦到るところに栽培せられ、最も廣く人に知られたる球根草花である。然れども其種類極めて多きが故一般に知られたるものは、僅に數種に過ぎぬのである。春色漸く動く頃、細長き單條の二三葉と、其間より花莖を抽出して莖頭に一輪若しくは數輪の幽雅なる花を開く、今左に其最も有名なる品種に就き説れば。

一、喇叭水仙、黄色の大輪にして、外圍は二三の短瓣を以て圍饒せられ、内部筒狀に突出して喇叭狀を呈す、これ其名の起る所以である。

一、黄金水仙、黄金色にして單瓣複瓣の二種ある。何れも大輪で頗る美麗である。

一、口紅水仙、花は白色の單瓣にして、更に莖を圍んで淺き筒狀のものがある。

此縁端紅を呈し恰も少女の口唇にべにつけたるに似て居る、花容優美にして一種の風韻を具ふ、鉢植となし室内裝飾に適する。

一、寒水仙、葉の形狀恰も蘭の如くにして、花は喇叭水仙の如く鮮黄色にして、葉間より花莖を抽出し、一花莖に數輪を着生する。

一、支那水仙、此種は多く水盤中に在りて發芽せしむるものである、専ら新年の裝飾用に用ひられる、夏期は球根を取り上げて貯藏し、十月上旬に一旦地に栽植し、十二月上旬若しくは中旬頃掘り上げて水盤中に移し、暖所に置くときは一月の候よく開花せしむることが出来る、花は白色にして内部黄色を帯び小形である。花容優麗の稱すべきものあらざるも、嚴冬花なきの頃よく開花するが故福壽草等と共に新春の裝飾に用ひらるゝのである。

一、秋水仙、葉は單條にして數葉を出し、其間より花莖四五寸を抽出し、八月



上旬より白色のサフランに酷似したる花を開く、秋水仙にして、八月開花するに於ては、名實相伴はざるの感あれども、一般稱呼に従つてこゝに述べて置く。

其他夏水仙、純白水仙等程々の品種がある。

栽培法は品種によつて異なるも、一般に謝花後花莖枯れたるとき球根を掘り上げ適當に乾燥して貯藏し、九月下旬若しくは十月月上旬他の球根草と同時期に、花壇若しくは鉢に栽植する。

violet

肥料としては他の球根類と同様、腐熟したる油粕、人糞尿の類を數回與へてよい。

○水仙翁

其名稱よりすれば水仙に屬する花瓣の如き感あれども、全く其性を異にする二年草で莖葉共に灰白色を呈し、極めて柔軟な綿毛を有する、莖は細長くして花

莖高く三尺許に及び、莖頭に着花する、色は紅色、淡紅色及白色の三種ある着花疎で艶麗を缺くが其風姿頗る高尚である。

下種の季節は春秋何れでもよいが秋播の方が結果がよい、此草花は寒氣に堪ゆる性は比較的強いが、暑氣の爲には復々腐敗することがある、春播は翌年四五

レ○スウ弁ト、ビー

多年生と、二年或は一年生とあり、本邦に於ては麝香連理草と稱し、莖葉共に豌豆に酷似し、花形亦殆んど全く豌豆に異らぬ、頗る色彩に富み白色、赤色、藍色、飛白、淡紫色等種々あり高き芳香を有する。

多年生のものは春秋何れの季節にても播種し、開花すること少い。其他は多く秋播とする、秋播は翌年五月上旬より、春播は七月頃に至り開花する、何れも蔓性である故に、五六寸に生長せば支柱を施し、之に纏絡せしめねばならぬ。



肥料としては、藁灰及腐敗した米糠等を用ふるが最もよい。

○香 莖

莖は洋名を「ヴァイオレット」と積し、内外共に最も賞観する草花である。種類は數十種の多きに上れども、栽培上大別して紫一重、八重、淡紫一重、八重、淡紫一重、八重及絞りの六種とする、芳香極めて高い、其他本邦原野に野生するものも多くある。

何れも頗る嬌小にして草丈四五寸を超へず、葉は稍々心臟形にして葉柄長く、花は奇形にして頗る可憐である、十一月頃より翌年三四月の候に至るまで絶へず開花する。

栽培法は容易で肥沃な土地若しくは鉢に植へ付ける、移植は春又は秋に行ふを最も良しとするが、其他の時期にても差支へない、此花秋末より冬季を通じて開花するものなれば、勉めて暖かき場所に培養せねばならぬ、鉢植は自由に暖所に

に運ぶことを得るも、花壇植には豫め南に向ひ、日當り良き様に植へ込み、時時稀薄の液肥を施すがよい。

### 第三章 夏の花

○ヘリアントス

強壯なる一年草にして、長一丈にも達し六月下旬頃より黄色の花を開く、花の直径二寸五分内外、中央に拇指大の黒褐色の蓋を有し、其萼は花瓣の數により甚だ多く、通常花瓣一に對し六片以上に達し、約三重に叢生して居る、良く生育するものは花梗長く尺餘に達する故直立するものは少い、其爛みたる状まことに捨てがたき情趣がある、莖葉は稍々粗造にして莖に班紋を有する。

繁殖法は實生にして、春三四月頃苗床に播下し、發芽程なく一回假植をする。而して更に三四寸に生長したる頃二三尺の距離に花壇其他に栽植する、栽植の際



し腐熟堆肥、骨粉等の少量を施し、生着したる頃人糞尿及び藁灰等の少量を追肥すれば最もよい。

○鞆繪草

宿根草にして春秋の二季に播種するを得、丈二尺内外に達し、六月の候より五瓣の黄花を開き其狀殆んど鞆繪に似て居る、これ鞆繪草の名ある所以である。繁殖法、精耕した苗床を作りて下種し、發芽後二三寸に伸長した時丁寧に移植し肥料を施すがよい、秋播のものは春播と異り簡単な防寒設備をせねばならぬ。

○虎尾草

宿根草にして播種株分共に四月頃行ふ、丈二尺乃至二尺五寸にして葉の縁に缺刻が有る、巾は稍々廣い、花は七八月頃より九月に至るまで絶ゆることなく、白、淡紫色等あり、形狀恰も虎の尾の如くなるを以て此名がある、鉢植としては稍々丈高さに失するの憾あれども、花壇の一隅に群植して眺むるときは其風姿捨て難い趣がある。

て難い趣がある。

繁殖、四月頃精耕した苗床に實播してもよいが、株分が最もはやみちである、三月下旬乃至四月頃其萌芽に先ちて根株を掘り起し、適當の大きさに之を分割して他に栽植する、栽植に先つて充分腐熟した堆肥、骨粉、灰等を施し、發芽後二回稀薄の人糞尿等を施給するがよい、又其儘のものが嚴寒の際根株が凍結する虞があつたならば、根際に稍々濃厚な寒肥を施給するがよい、寒肥の種類は人糞尿が適當である。

此花卉は抽莖に先だち莖頭に蚜蟲の付き易きものなれば注意を怠つてはならぬ。

○チギタリス

多年性の宿根草にして性强健である、草長高きは三尺許に達する、花は白、紫、紅、淡紅、黄色等の種々ある、七月の候より五六分の鈴狀をなしたる花を



簇開する、葉は心臟病に効ありと云ふ。

繁殖、春秋二期に實播し根分は四月上旬頃に行ふ、實播は先づ苗床に下種し  
發芽後程なく一回假植をして更に三四寸に伸長した時之を他に栽植する、而し秋  
播は防寒の設備をするが良、栽植に際しては少量の腐熟堆肥、灰、過磷酸の類  
を施し、生着後二三回稀薄人糞尿の類を施給する。

レ〇白粉草

一年草にして紅、白、黄及紅白の絞り等種々ある、又一株より双方を咲き分け  
ることもある、莖は綠色若しくは瑠璃色を呈する、三月下旬頃播下すれば七八月  
の候より晩秋に至るまで開花する、此花は餘り強い光線を好まぬ爲めか主に夕景  
に近い頃最も盛に開花する、草勢二尺以上に達し且つ枝梢を出すこと盛なる故  
に、一本の莖が能く數尺を充す大株となる、此花は謝花して後筒状をなせる萼中  
に白色で大豆大の結實がある、其内部に恰も化粧に用ふる白粉の如きものを包藏

する、これ白粉草の名ある所以である。

繁殖法、直接花壇其他に下種しても容易に發芽し、よく生育し開花するものな  
れど、成るべく床播として、二三寸に伸長したるとき目的の處に栽植するがよ  
い。

肥料として栽植の際少量の腐熟堆肥を施し、生着の後人糞尿を一二回施與する  
がよい。

レ〇羽衣草

強壯なる宿根草にして丈四尺内外に達し、白及淡紅色等の小花を簇開する  
葉の形狀恰も鋸の如くであるが故一名鋸草とも云ふ、切花として賞用せら  
れ又花壇用として適當である。

繁殖法は實生及株分けにして實生は春秋二期に株分けは春季發芽前に行ふ、實  
生は一旦苗床に下種し、秋播のものは發芽程なく一回假植して、寒中簡單な防寒



設備をする、而して春暖の候に至つて之を花壇又は畑地に植へ出し、春播のものは發芽本葉二三葉のときより之を他に栽植し、又は秋播と同様一回假植して後本植してもよい。

肥料には少量の腐熟堆肥を元肥として、骨粉や、灰や、人糞尿の類を二三回追肥とすればよい。

○貝殻草

强健なる二年草にして春秋の二期に下種すること出来る、初夏より秋期に至る間白、赤、黄等の極めて素朴の花を開く、花瓣頗る強硬にして枯死するも能く花形を亂さず、其状恰も貝細工せる花の如きが故一名貝細工とも云ふ、挿花として長く賞觀し又裝飾用に用ふるによい。

繁殖法は凡て實生にして、秋播は九月下旬苗床に下種し、發芽して本葉二三葉を出したる頃一旦假植し、寒中稿稈類を以て防寒し置くときは三月中下旬頃本植

に適する様になる、春播は三月下旬であつて發芽後一旦假植して後栽植しても、又其儘本葉三四枚出るまで其儘で養成して植へ出してもよい。

肥料として植出すとき腐熟堆肥の少量を與へ、生着の後人糞尿、米糠、灰等の少量を追肥とする。

○カンナ

多年性の宿根草にして、夏期より秋期の觀賞花としては此上に出づるものは少い、草丈二尺より五尺許に達し、其莖上に奇形にして艶麗なる花を着ける、花色は赤、黄、紋、覆輪等の種々ある、其矮小なるものを鉢植として培養するときは草丈一尺内外にすることが出来る、斯くしたものは花期一層早く初夏の候他花に先つて稍々小なる花を開く、「カンナ」の葉は莖と擁して上方に向ひ、廣大にして濃緑を呈するが故人をして清涼の感を起さしめる、栽培容易の方なるを以て近來至る所に栽培せられる。



繁殖法は一般に株分けである、晩秋降霜と共に其莖葉は枯死する故、此時掘り起して其莖を切り去り成るべく、温暖なる場所而して地下水の停滞せぬ所を選んで埋藏する埋める深さが餘り浅いと凍結する虞ある故注意せねばならぬ、斯くて春三月下旬頃になれば掘り出して之を目的の場所に植へ込むのである。肥料として植込みの際腐熟した堆肥灰等を施し、發芽の後人糞尿米糠等を一回施せばよい。

レ○釣鐘草

本名を「カンパニユラ」と云ひ一名風鈴草とも稱する、多年性の草花で、花莖三尺内外にも達し仲夏の候より釣鐘に酷似せる花を開く、故に釣鐘草と云ふのである、葉形及性状稍々「ヂギタリス」に似てをる、花色は白、紫、桃色、絞り等の種々あり、又一重八重等の別がある。

繁殖法は實生で春秋二期に行ふことが出来る、發芽して二三葉のとき一旦之を他の床に假植して、更に四五葉を生じた時本植する、栽植の際少量の堆肥及灰等を施し、生着の後一二次水液を追肥する。

○河原撫子

一年草にして莖狀鬆撫子に類似し、六七月の候より盛暑を凌ぎてよく開花をついける、花色は淡紅で花瓣は先端分裂して殆んど石竹の趣がある、多く山野に自生し花期長くして且つ佳麗である、水揚げ良好である故切花に適する。

○伊勢撫子

繁殖法は實生、挿木何れにてもよく發育するが實生によるが最も便利である。多年性の宿根草にして丈一尺内外の矮生花弁である、莖葉略河原撫子に似て花は單瓣である、花瓣稍深く裂て、色は白、淡紅及絞り等種々ある、頗も雅致に富み盆養としては最も妙である。

春秋彼岸床播にして、二三葉を生じたる頃、一度他の床に假植し、秋播は防寒



の設備をして越年させ、共に五六葉乃至七八葉を生じた時本植をする、植込の時少量の腐熟堆肥を施し、生着の後人糞尿、油粕等と一二回施せばよい。

○ ○ランタナ

半灌木の花弁であつて、種類多く三十種以上に達する、花態は本邦の紫陽花の如くにして頗る小さく、花色は白、樺、紅、赤、淡紫等種々ありて、頗る美麗である。

繁殖法は實生及挿木法であるが、挿木法は最も便利である、實生法は普通八九月の頃鉢又は床に下種し、冬期は温室又は室内に置き春期花壇に移植する、但し一年生では冬期中温暖にして充分なる手入れをせざれば花壇用として頗る小さいものである、挿木は挿木床か若しくは砂を盛れる鉢に、三寸内外に切り取りたる梢を挿入し發根せしむるのである、花壇及盆栽に最も適し切花として亦妙である。

肥料としては腐熟堆肥、過磷酸石灰、灰、人糞尿等を施し、盆養のものには油粕の腐熟水溶液の稀薄なるものを時々施すべきである。

○ ○孔雀草

菊科に屬する一年草にして、矯生種と普通種の二種ある、何れも黄金色の八重一重の花を開き、種類は餘り多くなく本邦に栽培せらるゝものは二三種に過ぎぬ、性質強健であり水揚もよく、又切り取つた後より漸次枝を出して開花する故切花として賞用せられる。

種子は四月上旬頃苗床に下種し、發芽後一寸位に伸長した頃之を他の床に假植し、更に三四寸に生育した頃之を花壇又は畑地に栽植する、鉢植のものは成るべく矮生種を用ひ三寸位の時鉢に取るのである、花壇及畑地の肥料には堆肥、灰、人糞尿を施してよく、鉢植のものには油粕、米糠等の腐熟した稀薄水溶液を與へてよい、

○ グラジオオラス



「グラジオラス」は鳶尾科に屬する花卉にして、栽培容易の方である、七月上旬頃より梢々漏斗形をした美花を開く、其他には黄、紅、白、淡紅、藤色或はこれ等の絞り等種々ある、草丈は三尺内外に達し、葉は我邦に於ける菖蒲に似て居る、故に唐菖蒲、流星、段咲菖蒲など云ふ、此花は葉と花との均合が良く且つ挿花として水揚もよく、花期も亦長いので漸次賞観者が増へ、近來では都會附近の農家は切花用として盛に栽培して居る。

尙此外姫「グラジオラス」と稱する丈二尺に充たざる矮生種がある、濃艶前者に及ばぬが、佳麗である何れも球根草であつて球根の分植或は實生法によつて繁殖する。

分球繁殖法は最も容易なもので秋期降霜の頃球を掘り上げるとき、附着して居る子球を栽植するので、最も容易な方法である、然し此方法では一時に多數の繁殖を企つことは困難であり、又變種を作出するには不便である、此場合には實

生法による。

實生法は春三月下旬頃苗床に下種するのが普通であるが、又採り播と云つて秋季採種するや否や直に下種する方法もある、此方法によるときは貯藏の手續もななく、發芽も良好である、春播に比し冬期防害の手續等は免れぬが又早く開花せしむることが出来る、尤も餘程温暖地方でなければ其儘越冬することは出来ぬ故、寒氣の襲來と共に之を掘り出して其球根を貯藏する、而して十月下旬から翌春三月頃までに之を栽へ付ける、春播も秋播も冬期中の貯藏は、乾燥砂土中に埋めて置くか又は餘り濕氣の多くない場所に置くがよい。

植込は前に云ふ通り十月より翌年三月頃までよいが成るべくは年末までに植えるがよい、秋植のものは餘り淺いと寒中凍結の虞がある故注意すべきことである、植込に際しては少量の腐熟堆肥、灰の類を施し、發芽後二回許人糞尿、過磷酸石灰の類を施すがよい、鉢植にするには植込は少しは後れてもよい、鉢の大



さは球根の大きさによつて異なるは勿論であるが、五寸乃至六寸のものをを用ふるがよい、鉢植の肥料には油粕を腐熟せしめた稀薄溶液を時々施してよい。

レ○グロキシニヤ

「グロキシニヤ」は熱帯産の植物にして、六七月頃美麗なる花を開く、色は淡紅紫、紅、白、黄及絞り等種々ある、其葉は桐大であつて亦美麗である、鉢植として最も適當である。

繁殖法は實生挿芽及葉挿等を行ふ實生は、一月より三月頃までに、膨軟な培養土を盛つた鉢に下種する、而し細微土を以て極めて僅に被ふか、或は全く覆土せず下種した上面を軽く押へ付けて置く、鉢の面には硝子板等を載せて温室又は木框の内に置く、而して時々細口噴霧器を以て少量宛灌水し、發芽後は漸次弱き光線に充て、本葉が出た頃之を他の鉢に五分乃至一寸位の距離に移植し、四五葉の本葉となつた頃には、苗は大に丈夫になる故此時一本宛三四寸の鉢に植へる、

而して追々生長して根が鉢に充つる様になれば、更に稍々大なる鉢に植へるのである、斯くの如くして生育するに従つて順次大なる鉢に移し、新しき培養土に代へることは、他の鉢物と同様である、挿芽は春期球根より發生した芽を、一二寸の長さに切り取り之を挿芽床に挿すのである、葉挿は充分成熟したものを葉柄を少しく着けて切り取り、之を挿すのである、何れにしても過乾過濕に陥らぬ様になし、又稍々蔭にして置くことが必要である。

植込みは春三四月頃で、五寸位の鉢に浅く植へ込むのである、而して温室又は温床中に入れ時々少量の灌水をする、此草花は日當り善き所よりは寧ろ稍々陰地を好む故、硝子面と葎簀等で被ふがよい、發芽後は幾分光線を餘分に充て従つて灌水も稍々増加せねばならぬ。

謝花後は漸次灌水を減じ遂に全く乾燥せしめ後球根を掘り出し、冬期は乾燥の砂土中又は温度の變化少き濕潤ならぬところに貯藏するがよい。



○松葉牡丹

丈低き強壯なる一年草にして、一重及八重の二種あり、色は黄、赤、淡紅、淡紫、絞り等各種の濃麗なる花を開き、旱天のとき最も盛に開花する、故に早魃草と稱するものもある、栽培容易にして花期長き故、花壇鉢植何れにも適し、就中花壇の周縁或は平面に撒播するときは一層の美觀を添へる。

播種は三月下旬乃至四月の上旬で、目的の場所に下種し極薄く覆土する、又輕鬆な土質では單に播種面を輕壓するを以て定る、若し覆土厚きに過ぐる時は却つて發芽せざることがある。

肥料として腐熟人糞尿或は油粕等の少量を施せば、仲夏の候より秋季に至るまで絶へず開花する。

○松葉菊

松葉菊は強壯なる宿根草である、莖葉殆んど松葉牡丹に似て稍々太く、花は恰

も麥稈細工の如き菊形で色は紅、白、桃色等で、花季は普通五六月である。

繁殖法は實生及挿芽の何れでも容易である、實生は四月頃鉢又は床播とし、本葉二三葉を發生した頃之を他の小鉢に植へ、他の鉢植と同様根が鉢に充つる様になれば、之を稍大なる鉢に移すのである、花壇のものは四五葉の本葉を生ずるまで播種鉢に置き、成るべく丈夫になりたる苗を植え出すが安全である。

肥料として人糞尿、灰、過磷酸等を施し、鉢植には腐熟油粕の水溶液を稀薄にして時々施與するがよい。

○罌粟

本邦古來栽培せらるゝ二年草で、種類極めて多く一々枚舉に遑なき程である、之を大別すれば單重咲、牡丹咲、狂咲等ある、其内最も賞觀せらるゝは、牡丹咲、狂咲にて何れも艶麗にして花瓣は堅に細皺ありて單調でない。

下種は九月下旬若しくは十月上旬苗床或は鉢に播種し、冬期は霜被を設け



ねばならぬ、春播も花をみることは出来るが秋播に比し遙に矮小である、移植は容易ならざるのみならず植代へを忌むものなれば、直播を行ひ適當に手入せねばならぬ、若し已むを得ずして罌粟の移植をする場合には、極幼種の時に行ふべきである、而して根部の周圍に土壤を成るべく多く附着せしめ、移植後生育を認むるまでは適宜日覆を設けぬと生着覺束なきものである、又始より移植を行はねばならぬ場合には、最初鉢播となし置き、移植に際し灌水して鉢より抜き直に栽植するがよい。

○芙蓉

落葉性の半灌木にして、初秋の候白、紅及絞り等の花を開く、花には單瓣と重瓣の二種あり、花容頗る高尚である。

繁殖法としては實生、壓條及根分け等にして、實生は春彼岸頃に播下し、二ケ年の後に開花するに至る、根分けは殊に容易にして且つ便利である。

○扶桑花

多年生の灌木にして落葉性である、花は壯麗優雅にして手入を怠らざれば四季絶へず咲く。

栽培法は露地なると鉢植なるを問はず常に充分なる肥料を施し、冬季は南向の温所に置き霜除けをせねばならぬ、然らざれば多く枯死するもので種類多くして赤一重大輪、紅段咲、黄色八重、紅一重及絞り等ある、最近流行の草花で、鉢植として段上に飾るに最も適する。

○コリウス

矮生の多年草にして、近來の航來に係り近頃大にこれが栽培をみるに至つた。其草丈に高低あり、葉色に種々の色彩がある、其花は稍々紫蘇に似て美しい。

元來此草花は花よりは葉を賞観するもので、従つて其葉に濃紅あり赤色あり黄色あれども、亦これ等諸色の班入するものが多い、種類を細別すれば數十種の



多きに達する。

繁殖法は實生及挿木等にして、實生は春彼岸頃床播又は鉢播とする、鉢播は温室又は「フリューム」に取り入れ時々灌水し、床播は注意して強雨に打たしめぬ様にする、而して二三寸に生長したる頃移植する、挿芽は容易の方にして完全なる挿芽床あらば、時期に係はらず能く發根するが他に在つては四五月頃乃至入梅頃に行ふがよい、株分けは時期を選ばざれども、土用中は困難である、冬期中は鉢植として温室或は温床に入る、か、或は成るべく温暖な處に於て充分防寒設備を施さざれば枯死するに至るものである。

○天竺牡丹「ダールリア」

比較的古くより船來せる西洋草花である、從來天竺牡丹と云へば八重球咲の一種に限られしが如くであつたが、近來に至りこれが栽培に意を用ふるもの多く、特に多くの新種渡來せるが爲、從來の八重咲の如きは殆んど顧られざるに至つて居る。

て居る。

種類極めて多く、殆んど枚舉に遑ないが、現今最も愛觀せらるゝは捻咲（カクタス種）菊咲等である、今一二の種類を異記してみれば左の如くである。

捻咲は菊花に似各瓣捻曲し、濃紅、淡紅、緋赤、黃、絞り等種々ある、何れも高尚優美で他に比類少いのである。

菊咲は前者に次ぎて艶麗なるものにして、花色亦種々ある、大輪のものに至りては輪經七八寸に達するものがある。

聯隊旗、單瓣にして紫紅、淡紅色に白色の條班を装ひ、恰も聯隊旗の如き趣ある所よりも此名があるのである、容姿優美なること前者に劣らぬ。

其他種類極めて多く一々枚舉に遑なく、菊咲又はカクタス種中にも各十數種以上の品種があるのである。

天竺牡丹は多年生の球根草にして栽培はさのみ困難でない、春四月上旬乃至



中旬頃植る出すので、鉢植、花壇植共によいが鉢植は成るべく大形のものを用ひねばならぬ、栽培に際しては腐熟堆肥の少量と灰、過燐石灰等を施し、發芽の後少量の人糞尿の類を施給するがよい、鉢植は成るべく矮性になる様にし、猥りに肥料を施さぬ様注意が必要である、又灌水も寧ろ控へ目にするが利益である。天竺牡丹は莖葉軟弱にして而かもよく繁茂するが故、風雨等の場合には頗る折れ易い、殊に鉢植等の場合には最初より支柱を立て、置かねばならぬ。花は六月下旬より十月下旬まで絶へず開く。

繁殖法は實生根分け及挿芽にして、實生は春彼岸頃に播下し、二三寸に生育したる頃他に移植する、實生はよく新種を作出するを以て一般に行はれる、肥培に注意すれば九月頃には開花するを得る。

根分けも亦一般に行はるゝ方法で、貯藏せる球根は春暖と共に漸次萌芽を初むるを以て、各株必ず一芽を存する様に切り離して植へ込み、覆土は土質より

異なるが四寸の厚さにしてよい。

謝花後降霜期に至れば莖葉枯羽する故。此期に至れば掘り上げて少しく乾燥し濕潤あらざる土中に埋藏するのである、若し露地に其儘置かんとするには、先づ莖葉を刈り取つて其上に一尺内外覆土して置けばよい、但し土地冬季濕潤の處では行い難い方法である。

○アマリス

石蒜科に屬する球根草花にして、種類多く近年に至りて栽培稍々盛となつた。葉は滑澤にして長く數條を出し、葉の間より一乃至二本の花梗を高く抽出し、莖頭に百合に酷似したる大輪の花を開く、花色は種類により異れども、濃ツバメ咲、緋白絞り、白紅絞り、白鷺咲、緋大輪等あり頗る濃麗である。

栽植は十月乃至翌早春の候まで、花壇鉢植何れでもよい、花壇のものは稍々深植にして、嚴寒の候は成るべく充分に霜除けをして置くがよい、鉢植は球の大き